

中央アンデス形成期文化の研究（Ⅱ）

——チャビン文化の出現、拡大とその背景——

歳原佳世子

I. チャビン文化の分布の問題とアプローチの概要

前稿では、中央アンデス形成期の鍵となるチャビン文化について、タイプ・サイトのチャビン・デ・ワンタル出土の土器に基いて編年を見直すと共に、チャビン式土器の定義を試みた。はたしてチャビン・デ・ワンタルが本当にチャビン文化の中心だったのか、またチャビン・デ・ワンタルにはB群の土器文化に先行する文化は本当になかったのか、という点はたしかに問題である。残念ながら、現在知られている資料ではどちらの問題についても肯定も否定もできない。それゆえ、あくまでも現今の資料に基いて、という条件付きで、以下、論を進めていくことにする。

前稿でも述べたように、“チャビン文化”と一口にいても、その表れ方は地域によって様々であり、その時空間分布はいまだに定かではない。また、前稿で明らかになったように、チャビン・デ・ワンタルの最初の土器文化はアンデス山脈東斜面地域の先チャビン期の土器文化と関係があり、また、それとほぼ同時期か少し遅れておそらくアンデス西斜面地域から海岸地域の文化の影響も入ってきたとできる。すなわち、チャビン文化はその成立の段階からアンデス諸地域の文化の影響を受けていた、あるいはチャビン文化は先行するアンデス諸文化間の相互関係を背景として成立した、と考えることが可能になったのである。かくして、いわゆるチャビン問題（チャビンの拡大した範囲、チャビン文化と地方文化との関係など）も、先行諸文化間の関係を無視しては議論できなくなってきたわけである。そこで、特に形成期下層の諸文化のあり方、それらの関係を知ることが急務となるのであるが、その前にまずチャビン文化についてその様相を明らかにしておく必要がある。すなわち、先述したチャビン文化の表れ方の地域差とはどのようなものなのか、チャビン文化はどのように拡大していったのか、その拡大の背景には何があったのか、などをある程度把握した上で、チャビン文化と先行諸文化との関係、先チャビン期の様相を理解していく必要があると考える。

このような問題、あるいは“チャビン問題”に立ち戻っていえばチャビンとは何か、ということに関しては、かなり早い時期から諸説が提示されている。たとえば、カリオン（'48）はチャビンを“Religious Empire”と呼び、ラルコ・ホイレ（'38）はチャビンを海岸起源の“Pilgrimage Center”と考えた。またウィレー（'51）はチャビンを独特の宗教祭祀に関係する“Art Style”と考え、その意味を“horizon”の概念を用いて説明しようとした。これら一連のチャビンの解釈は、チャビンの

宗教的性格に関連したものであるが、他方、その当時の社会の世俗的な側面に関係づけた解釈もある。たとえば、サンダースはチャビンを“Patron God”，すなわちある共同体（community）のシンボルであると考え、バーガー（'83）は危機のあとの“Revitalization”と捉えている。このようにチャビン文化の出現、拡大、消滅の背景や性質がいまだに判然としないことの大きな理由の一つとして、“チャビン”を一つのまとまったものとして捉えようとするあまり、“チャビン”の各地における表れ方や影響の強さなどの多様性を体系的に検討することが、充分に行われなかったことが挙げられる。

それゆえ、本稿ではチャビン文化の分布とその背景の問題を扱い、先チャビン期の地方文化とそれらの相互関係については別稿で考えることにする。前稿でもふれたように、中央アンデスは、調査の遅れ、偏り、報告の不足などのため、資料の質、量共に充分とはいえない。ここでは、いわゆるチャビン遺跡、またはチャビン関係遺跡とされるものについて、以下の定義にしたがって資料を抽出し、検討していくことにする。

前稿で述べたように、チャビン文化の特徴は様々な要素によって構成されており、それらの完全なセットはこれまでのところチャビン・デ・ワンタルでしか知られていない。したがって、これをそのままチャビン文化のいわば条件として他の遺跡にあてはめることはできない。ところで、セットをなすこれらの諸要素は次の二つに大きく分けることができる。すなわち、可動性のもの、遺物とそうでないもの、遺構である。これらのうち建造物は、たしかにある思想、概念、イデオロギーを反映しうるものであり、遺物とちがって直接搬入と紛らわしくなることはまずないのであるが、いわゆるチャビン文化の建築の特徴であるとされるU字形や sunken court を伴うものは、実は、先チャビン期から存在しており、遺物の共伴も常に期待できるものでもない。それゆえここでは、チャビン文化の分布を明らかにするという限られた目的のために、チャビン・デ・ワンタル遺跡出土の遺物に基いて、いわゆる“チャビン特徴”を次のように設定した。これらは主に石彫のモチーフと特定のデザイン要素、および土器の文様、技法、器形に基いている。

A. 石彫

1. 牙、藪睨みの目、鋭い爪、曲線様式文などの様々な要素やこれらをもった猫科動物、ヒト、トリ、ヘビなどの像が複雑に組み合わせられたデザインが平石などに描かれるもの（Fig. 2, 3-1）
2. 猫科動物やヒトの頭部を表した丸彫り（Fig. 3-4～7）
3. かなり写実的に表現された人物、希れ（Fig. 3-8, 9）

これらのうちのいずれか一つ以上が見られたら、その遺跡はチャビンと関係があったものとみなされる。3. は、例数が少なくはたしてチャビン特徴として適切か議論の余地があるが、とりあえず、出土遺物のうちということにとりあげることにした。

B. 土器

中央アンデス形成期文化の研究 (II)



Fig. 1 中央アンデス形成期関係遺跡：遺跡カテゴリー A-○, B-□, C-△

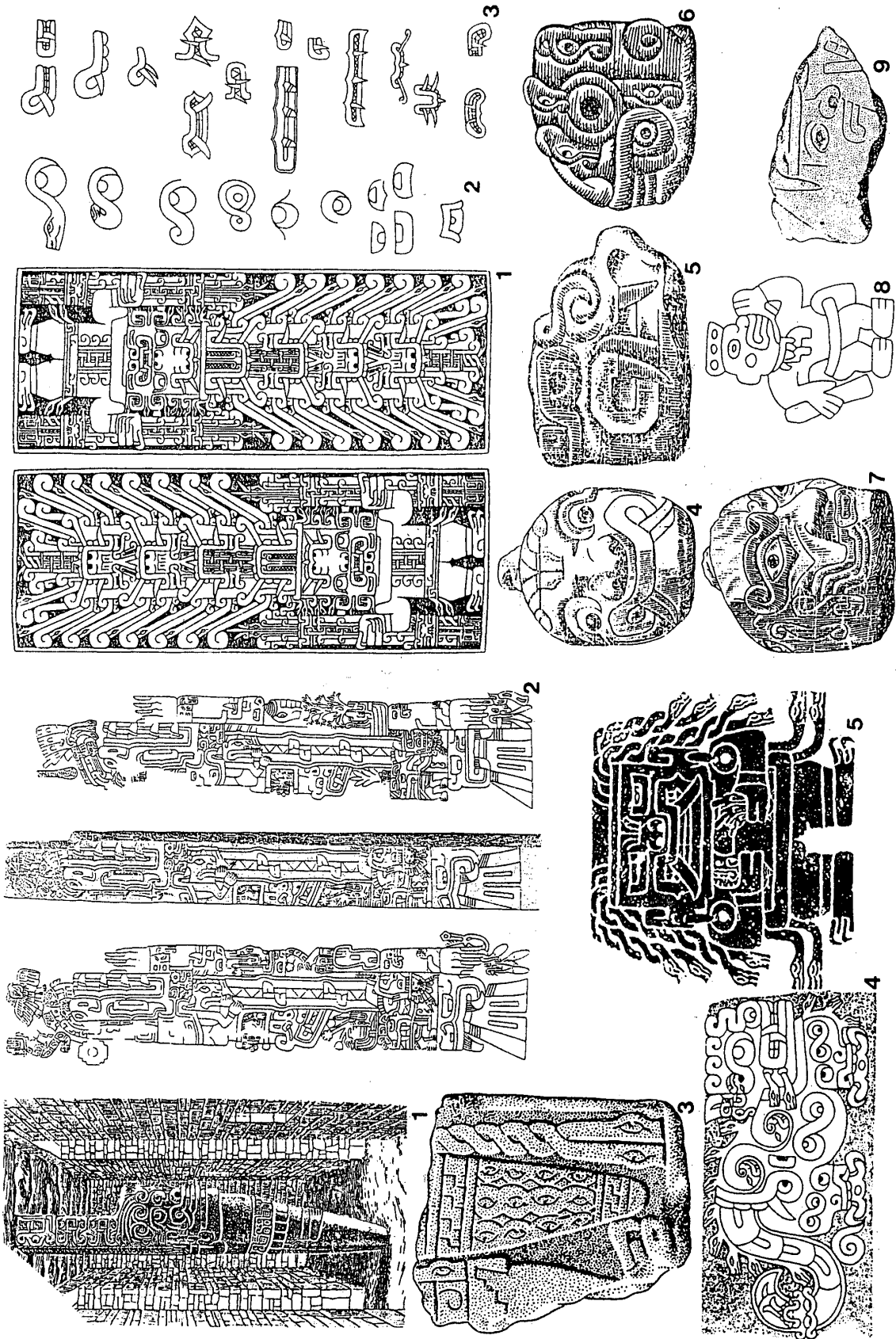


Fig. 2 チャビン・デ・ワントン出土石彫

Fig. 3 チャビン・デ・ワントン出土石彫

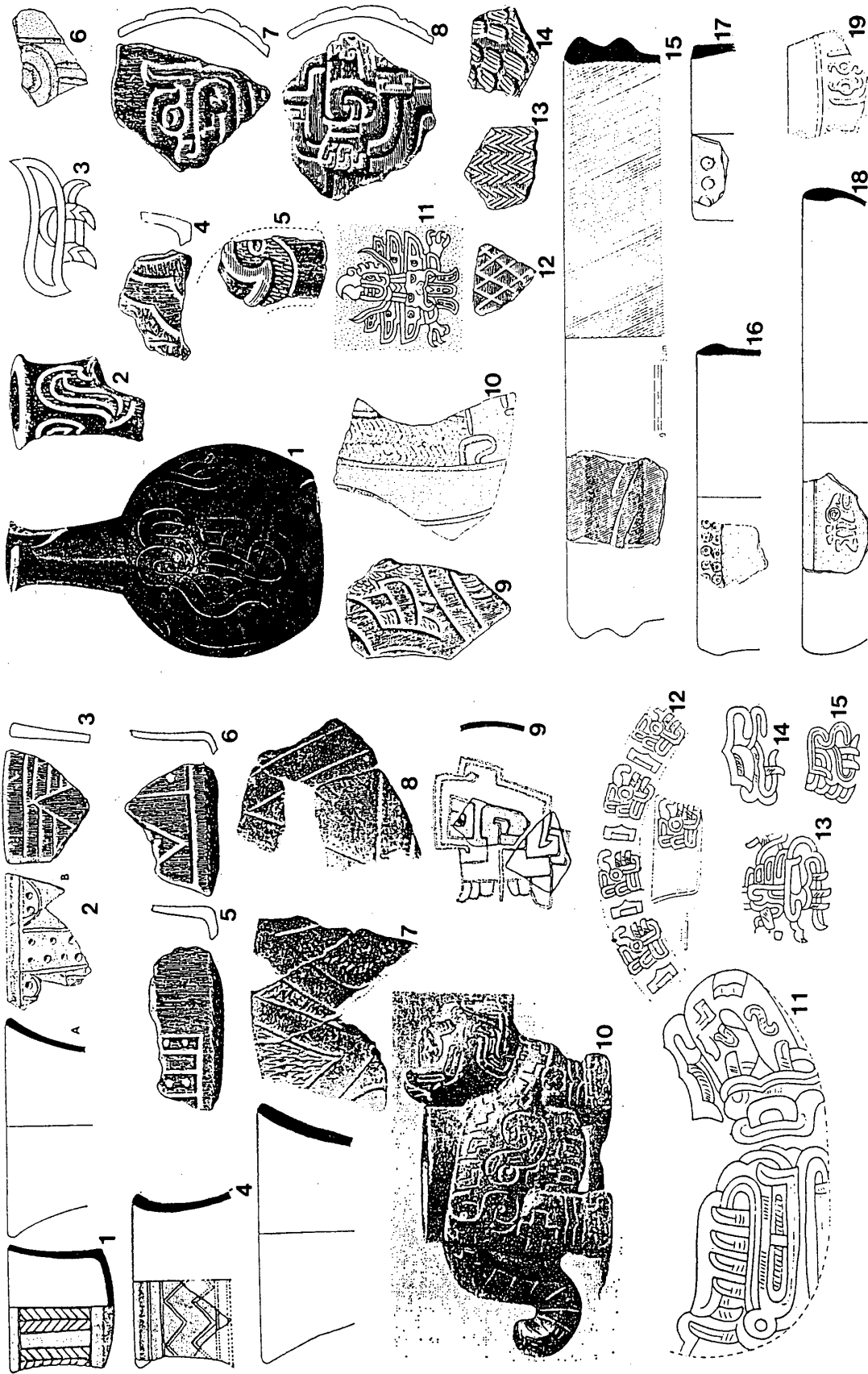


Fig. 4 チャビン・デ・ワントラル出土遺物：B群1～8、D群11～15 Fig. 5 チャビン・デ・ワントラル出土遺物：D群1～14、A群15～19

1. 前稿のチャビン・デ・ワントルD群（および Of I -1~5群）（Fig. 4-11~15, 5-1~14）よく磨研された鉢形や単注口壺，鏡型注口壺の胴部に主に猫科動物やその属性を中心としたモチーフやそれらの様式化された曲線文が描かれる。この土器は石彫1と関係があることは明らかで，様々な動物との複雑な組み合わせ文も見られる。これらはほぼ同時期とでき，チャビン期の前半に位置づけられる。

2. 同じくA群（Fig. 5-15~19）

D群から派生したもので，D群のモチーフの要素を押印捺技法で表す文様を特徴とする。

A群のモチーフはときおり石彫のモチーフに含まれており，そのような石彫はA群と同時期とみなす。これらはチャビン期の後半に位置づけられる。

これらのカテゴリーにしたがって，チャビン（関係）遺跡といわれるものを次章で検討していくが，その際，まず各遺跡について“チャビン特徴”を取り上げ，上記の定義に照らし合わせてその質を検討する。すなわち，たしかに“チャビン特徴”といえるか，チャビン・デ・ワントルにみられるチャビン特徴とどの程度の類似性または同質性をもっているか，などである。次に，その程度によって遺跡をいくつかのカテゴリーに分け，その分布のパターンを調べると共にそのパターンの意味するところを考えていく。そして，それに基づいてチャビン文化の出現と拡大の背景，あるいはチャビンの表現の多様性の背景をも考えてみたい。

ここで扱われる遺跡は，チャビン（関係）遺跡といわれているもので，上記のチャビン特徴の検討が可能となるような遺物の図示がある，以下の21の遺跡ないしは地域である。出土状況や共伴関係などはそのつどふれていくことにする。（Fig. 1）

高地—ワヌコ盆地，ヤウヤ，ワリコト遺跡，ワルガヨク，ラ・パンパ遺跡，クルトゥル・ワシ遺跡，パコパンパ遺跡，アタウラ遺跡

海岸—チョンゴヤベ（ランバイエケ河谷），チカマ河谷，カバヨ・ムエルト遺跡（モチェ河谷），セロ・ブランコ遺跡（ネペーニャ河谷），プンクリ遺跡（ネペーニャ河谷），セロ・セチン遺跡（カスマ河谷），パンパ・デ・ラス・ヤマスーモヘケ遺跡（カスマ河谷），パユカ遺跡（カスマ河谷），アンコン・スーペ河谷，ガラガイ遺跡（リマック河谷），カルワ遺跡，カヤンゴ遺跡，オクカヘ遺跡（イカ河谷）

Ⅱ. いわゆるチャビン遺跡と文化圏

本章では，いわゆるチャビン遺跡とそれらのチャビン文化との関係の質を検討していくが，先述したように，各地，各遺跡によって“チャビン特徴”といわれているものの表現は実に多様である。そこで，それらの“チャビン特徴”と先述の定義に基づく（チャビン・デ・ワントル遺跡の）それとの類似性，同質性の度合によって，次の四つのカテゴリーを設定した。

A：石彫などの彫刻類および土器，石製品，骨角製品など，人工遺物の複数種にチャビン特徴が明らかに見られるもの。いわゆるチャビン文化に包含される。

中央アンデス形成期文化の研究（Ⅱ）

B：おそらくチャビン遺跡とできるが、石彫のみに基くなど証拠が不十分なもの

C：チャビン特徴の構成要素のうちの1～2がみられるが、他の多くの要素が異なる、あるいは大きく変容し、チャビン特徴とは認められないもの。チャビン遺跡ではなく、チャビン文化の影響を受けた、またはチャビン文化と何等かの関係があった遺跡。

D：チャビン特徴がみられず、構成要素もチャビン文化の影響があったと認め難いか、または、きわめて弱い。チャビン遺跡ではないか、非常に疑わしいもの。特に土器がわからず、証拠不足で、Cと決し難い遺跡。

以下、出土資料に基いて各遺跡を上記の四つのカテゴリーに分類し、その分布から、“チャビン”の広がり、それと地方文化との関係を考えていくことにする。

1) ワヌコ盆地 (Fig. 6) — A —

この盆地はアンデス山脈北中部の東側斜面上、標高約1,900mに位置する。アマゾン川の五大支流の一つのマラニョン川の支流、ワヤガ川の上流沿いの盆地で、東西約20kmの中に形成期の遺跡が六ヶ所知られているが、そのうちチャビン期の文化層を包含するのは3遺跡である。

この盆地ではいわゆるチャビン石彫は発見されていない。土器に関しては、主にD群とA群の土器が、コトシュ遺跡をはじめとして盆地内のチャビン期の土器文化を構成している。コトシュ遺跡出土の土器の一つには“Staff God”のモチーフが描かれている。Staff Godはチャビン期後半の典型的なモチーフの一つで、石彫にも多く描かれているものである。

同じくコトシュ遺跡の、先チャビン期（コトシュ期）の鉢形土器に、刻線と刺突で猫科動物と思われる具象的な文様が描かれているものがある。また、盆地中央に位置するシャコト遺跡のコトシュ期の墓から、若干の彫刻付き骨製品が出土しているが、それらには猫科動物の属性をもつ顔、牙のある口が表されており（Fig. 6-5）、チャビン・デ・ワンタルのランソン像と関係あるともいわれている（Izumi et. al. 1972 P. 69）。しかし、目の表現は一つを除いて藪睨みになっておらず、チャビンのそれとは異なっているし、チャビン彫刻には見られない要素（円形の顔など）も入っている。

また、ワヌコ盆地のコトシュ期の土器の代表的タイプの一つ“Grooved B-1”は、前稿で述べたように、チャビン・デ・ワンタルのB群の土器と共通する要素をもっている（Fig. 4-1～6, 6-2～4）。特に、その特徴的な器形、大型で正円形の刺突は他地に例がなく、両者の関係を示すよい指標となる。

このような、チャビン文化とのつながりを示唆するような先チャビン期の要素の存在は、ワヌコ盆地の先チャビン期の文化がチャビン文化の出現に何等かの形で関与していたことを暗示するものかもしれない。チャビン彫刻が存在しない理由は、ワヌコ盆地がかなり早い時期からチャビン文化の一部となったためチャビン文化との関係のシンボルとして掲げる必要がなかったのかもしれない。もちろん、まだ未発見なだけで、今後の調査などで発見される可能性も充分ある。

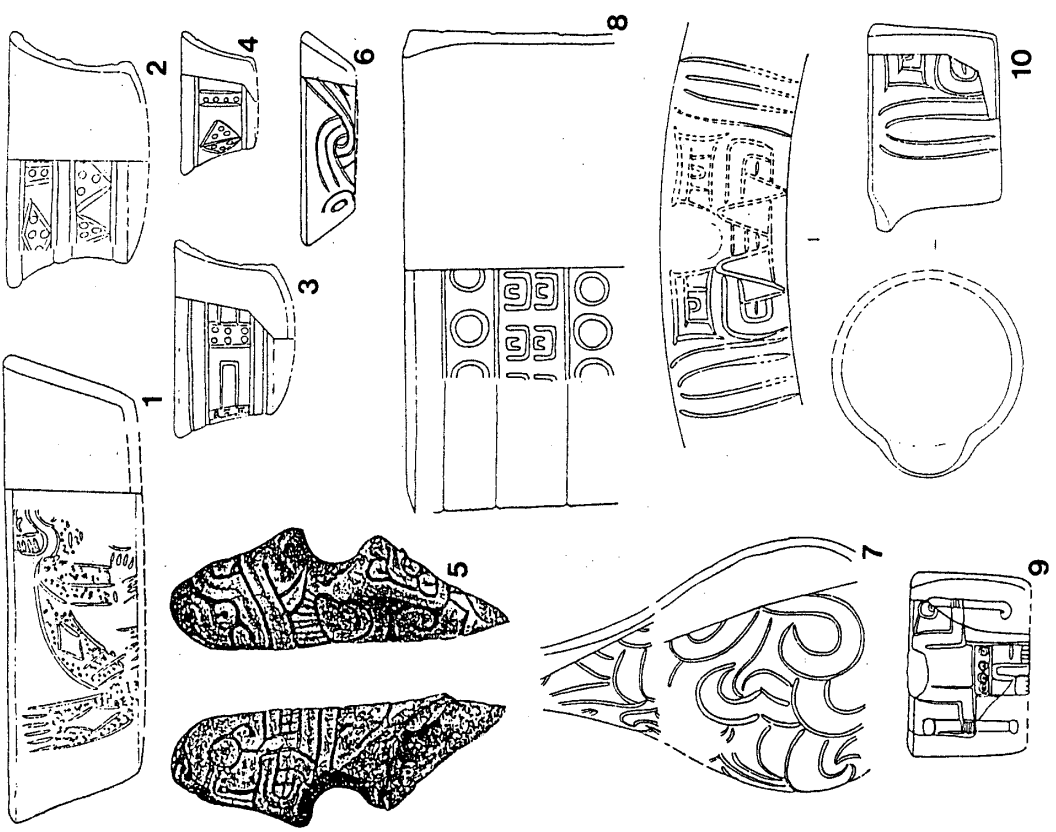
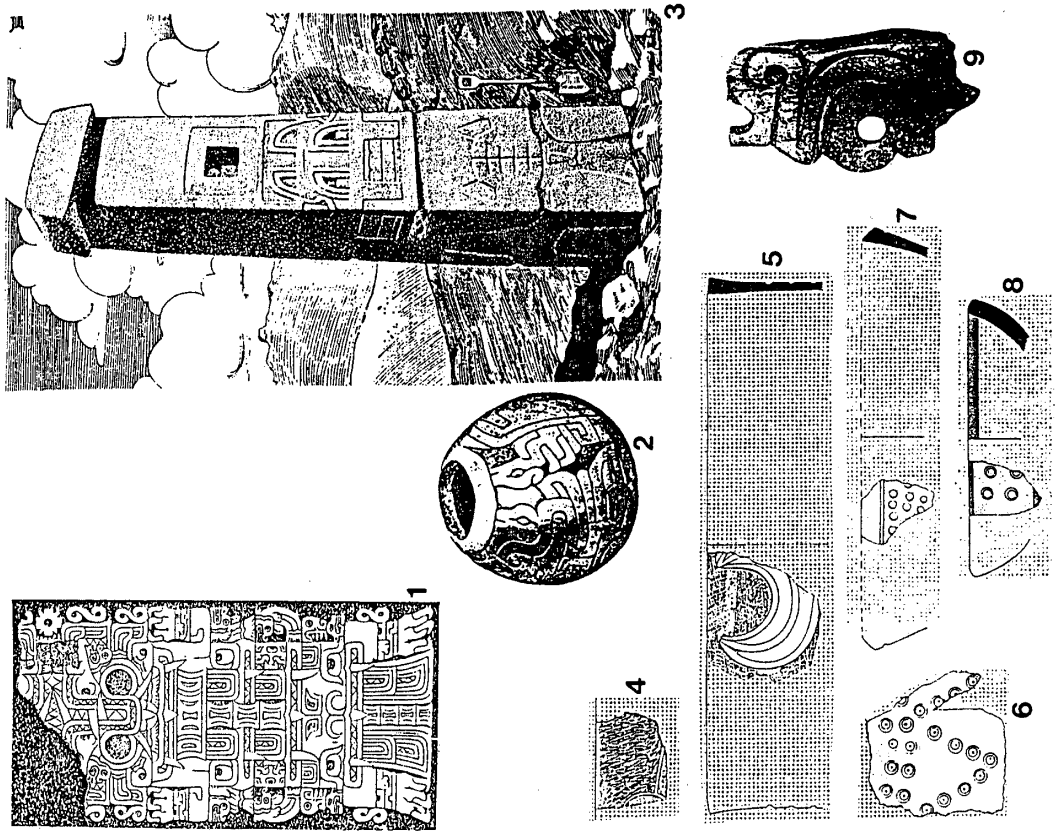


Fig. 7 ヤウヤ1 ワルガヨク2.3 ワリコト4~9

Fig. 6 ワヌコ盆地出土遺物：コトシユ1~4.6~10 シヤコト5

2) ヤウヤ (Fig. 7-1) — B —

チャビン・デ・ワンタルの北方、マラニョン川流域の地で、石彫が一点のみ発見されているが、これは発掘による資料ではない。この石彫はタイプ1に入れられる。石彫にはたてに半截し左右に開いたワニが描かれているが、その様々な要素の複雑な組み合わせやワニの描き方は、チャビン・デ・ワンタルのテーヨのオベリスク (Fig. 2-2) と強い類似性を示す。テーヨのオベリスクでは植物が描かれているが、ヤウヤの石彫ではその部分が魚に変わっている。これを“チャビン”との関係で考えるならば、ヤウヤの中心的な神格はワニあるいは水に関するものであり、いわゆるチャビン文化の神格群の中から借用ないしは授与されたものとも解釈される。この石彫に基いて、ヤウヤの地は“チャビン”の中に組み込まれていたとすることができるが、他の資料がないため、将来的には発掘によって再検討をする必要がある。

3) ワリコト (Fig. 7-4~9) — A —

本遺跡は、カエホン・デ・ワイラスの中部を見渡す、標高2,750mの段丘上に位置している。チャビン石彫は発見されていない。土器はD群、A群共に出土しているが、D群は少ない。ワリコト遺跡では、“チャビン”に関係する文化期は二つに分けられ、D群は前期カピヤ期に、A群は後期カピヤ期にそれぞれ伴う。また、彫刻付きの骨製品が一点、後期カピヤ期から出ている。“チャビン”の典型的な曲線文が描かれているが、目、牙、爪などの表現は見られない。

ワリコト遺跡の文化変化は、ワヌコ盆地のそれとよく類似しているが、ワヌコ盆地ではチャビン文化期は一つで、D群、A群が混在しているのに対し、ワリコトではチャビン期が二分されるなどチャビン・デ・ワンタルの変化により敏感であることから、ワリコトの方がチャビン・デ・ワンタルと、より関係が強かったように思われる。したがって、ワリコトはチャビン遺跡とできる。

4) ワルガヨク (Fig. 7-2, 3) — D —

この地域の資料はいずれも発掘によって得られたものではない。石彫が一点、ヤナカンチャで発見されている。猫科動物の顔を持つおそらく人物が蹲居の姿勢をとっているが、このような姿勢そのものはチャビン特徴の主要素にはなく、また、猫科動物の顔といっても目や口などに見られるようにいわゆる“チャビン”の表現ではない。手にも爪は描かれていない。したがって、この石彫はチャビン彫刻とはいえない。

この地方からの出土遺物としてもう一点、小型の石鉢がある。円形の胴部全体に典型的なチャビンのへビ文様を描いたものである。しかしこれは、ある農園から出土したことが知られているだけで、先の石彫に伴っていたわけでもなく、出土状況も他の共伴遺物も不明である。たしかにチャビン文様をもってはいるが、たった一点の可動性の遺物だけでは、“チャビン”がこの地域に存在していた、あるいは影響をおよぼしたかどうかを決定するには不十分である。また土器資料がないため、チャビン文化との関係もわからない。上記の石彫に基く限りでは、今のところ“チャビン”の直接的な証拠はないといえる。

5) ラ・パンパ (Fig. 9-10) — C —

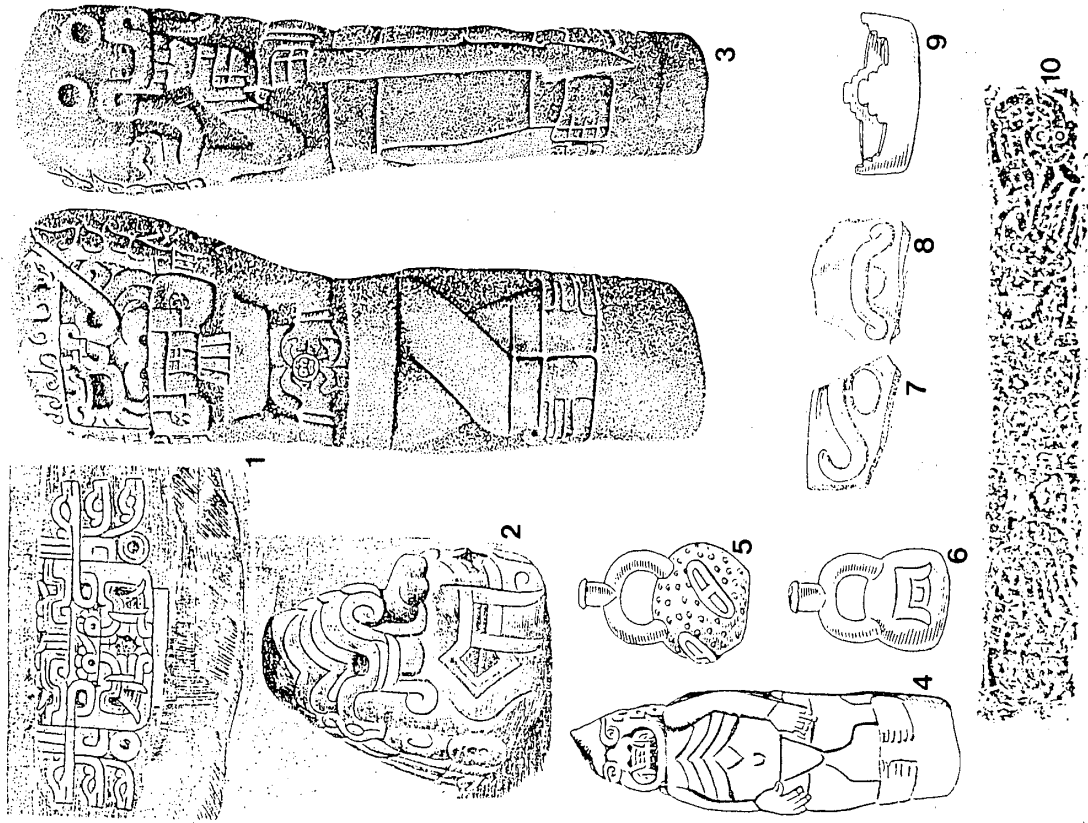


Fig. 9 クントウル・ワシ1~9 ラ・パンパ10

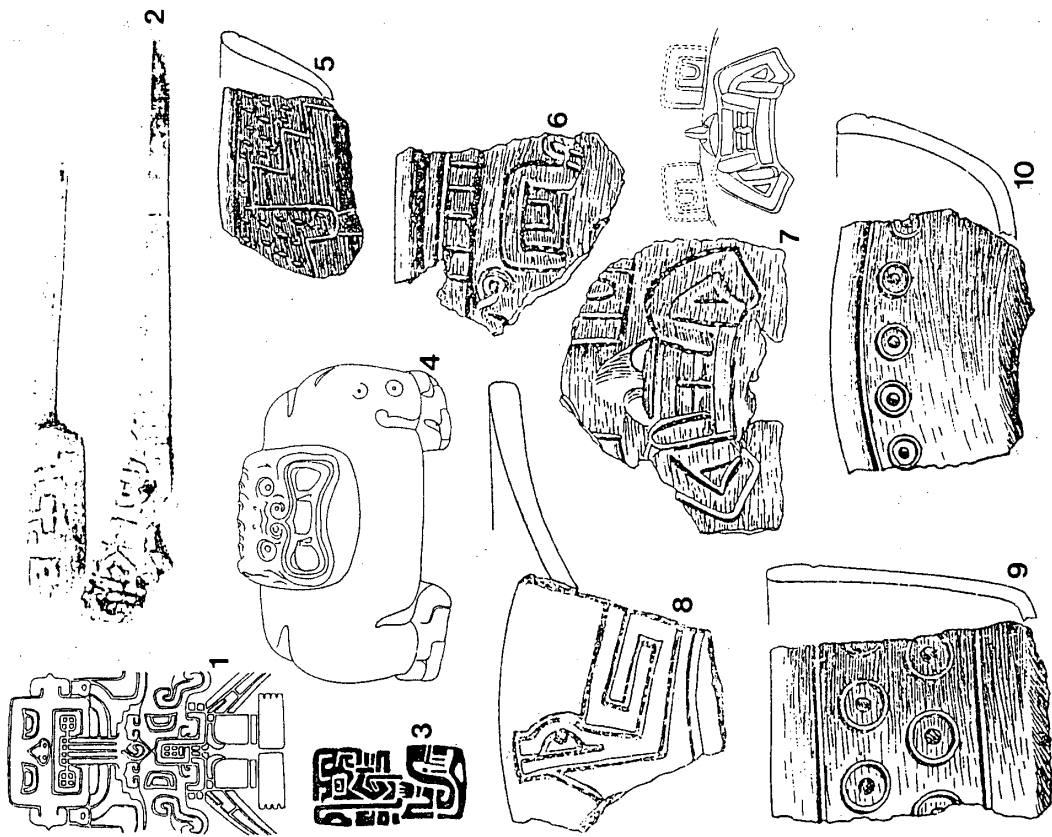


Fig. 8 パコパンパ出土遺物

サンタ川の支流、マンタ川の左岸の台地上に位置している。標高は1,650mで、谷底との高度差が500mほどある。

石彫が一点知られているが、発掘によるものではなく、村の広場の片隅に放置されていたものである。デザインは曲線的な帯で両端が神格的なものの頭部になっている。鋭い爪をもつ手も見られるが、目や口の表現は“チャビン”のそれとは異なり、また、様式化や複雑さの程度もチャビン文化のそれほど高くはない。わずかに“チャビン”の影響の片鱗は認められるものの、この石彫は、基本的にはその地の特徴をより強くもっているといえる。

土器に関しては、D群はごく少量であるが、A群は特にマウンド-4で多量に出土している。また、A群に典型的なS字文を刻線で描きそこに赤色顔料を充填した小型の石板もみつまっている。

これらから、ラ・パンパ遺跡には“チャビン”後半の影響が明瞭に認められるといえるが、石彫からみて、チャビン遺跡とは言い難い。ラ・パンパ遺跡は全部で10のマウンドから成っているが、発掘調査されたのはそのうちの二つだけで、それも全掘されたわけではない。それゆえ、将来発掘によって新たな証拠が明らかになる可能性は高い。

6) クントゥル・ワシ (Fig. 9-1~9) — A —

本遺跡は、ヘケテペケ川の二つの支流にはさまれた地域に小高い丘状にそびえており、標高は、2,200m がある。

五つの石彫が発見されているが、いずれも建造物に共伴したものではなく、地上に取り残されたような状態でみつまっている。一つは、牙のある口、ヘビの髪をもった顔で、頭部や顔の一部は牙、歯、口などのモチーフを用いた複雑なデザインになっている (Fig. 9-1)。これらはみな、チャビン石彫の重要な要素である。目の表現だけは典型的なチャビンの目とは異なっているが、この石彫はタイプ1に入れられる。この遺跡で重要なことは、数少ない石彫タイプ2の例がみつまっていることである (Fig. 9-2)。図からは瞳の部分が判別しにくいだが、目全体の表現のほか、牙のある口、先端がヘビになる曲線的な髪などは、チャビン石彫独特の表現である。以上の二つは、チャビン石彫とできる。

一点、2mを超える一枚岩の両面に神話的な人物像を描いた石彫が発見されている (Fig. 9-3)。一方の像は、藪睨みの目、牙のある口、猫科動物の鋭い爪、ヘビはないが曲線的に描かれた髪をもつ。これの特徴的なのは、これらのチャビン特徴の他に特殊な表現がいくつかみられることである。片方の目は円形で、頭の方まで延びる輪郭線がヘビになって終わっている。また口から何か下がっており、両手で人頭様のものを持ち (trophy head?), 足を交差させている。反対側の面には、牙をもつ口はあるものの、他にはチャビン特徴と認められるものはない。この石彫は、“チャビン”からの影響あるいはそれによる土着の神格の変容を暗示しているのかもしれない。

他の二点の石彫は、一点に牙のある口の表現がみられる (Fig. 9-4) ことを除いて、チャビン石彫とは大きく異なるものである。

土器はD群、A群共みられるが、D群の曲線様式文はこれまでのところ知られていない。

この遺跡のデータはまだ完全に公表されていないため、遺跡の分類も議論の余地があるが、石彫に基いて、一応、土着のまたは他地の特徴も包含するあるいはそれと並行するチャビン遺跡とすることができる。

7) パコパンパ (Fig. 8) — C —

マラニョン川の支流チョンタ川に沿った、アンデス山脈極北部山中、標高2,410mに位置する、大マウンド遺跡である。

本遺跡では、“Staff God”を描いた石彫が一点みつまっている。藪睨みの目と複雑な組み合わせ文をもつが、口には牙がなく鋭い爪もみられない。二本の杖は変形して表され、尾羽根様の要素も見える。口の表現はクントゥル・ワシの両面石彫の一面のものに酷似している (Fig. 8-1)。“Staff God”では牙ははっきりしていないが、歯の間の空白によってその痕跡が表されている。バーガーは、これの体部の表現ならびにカルワ遺跡出土の織物に描かれた像との比較に基いて、この石彫を“Staff Goddess”と呼んでいる (後述)。この他、“Standing Jaguar”と呼ばれる石臼、石製品が若干数出土している。これの体部には円・圏点文が施されているが、顔の表現は典型的なチャビンのそれとは異なっている。また、藪睨みの目と牙のある口をもつ人物像が描かれた骨製品が一点知られている (Fig. 8-3)。目と口の表現はチャビンとできるが、他の要素については定かではない。

土器に関してはD群の典型的な曲線様式文は見られないが、直線的な猫科動物やヘビのモチーフをもつ土器と共にA群の土器もみつまっている。

パコパンパでは、強い地方伝統に“チャビン” (後半期) の影響が加わったものと認められる。ここで注意しなければならないのは、この地には先チャビン期からすでに複雑な様式文が存在し、石・骨などに描かれていたことである (Fig. 8-2)。おそらくパコパンパは、“チャビン”の出現に何等かの形で関与し、“チャビン”成立後もしばらくは独立を保っていたものと思われる。そして、“チャビン”の拡大期といわれる後半になって、その影響を受け入れるに至ったものであろう。それゆえ、パコパンパはチャビン遺跡とは認められない。

8) アタウラ (Fig. 14-4~8) — C —

アンデス山脈中部、マンタロ川中流部に位置する、おそらく居住地である。

アタウラ遺跡のデータはまだ充分には公表されていない。しかし、図示された土器の中にはA群がみられる他、D群に属すると思われるものも散見される。が、曲線様式文はない。また、石彫その他、土器以外のものでチャビン特徴を確認できるデータもこれまでのところ知られていない。

本遺跡は、土器に基いて“チャビン”の影響は認めることができるが、チャビン遺跡とはできない。“チャビン”の南限の問題も含めて、将来的に確認される必要がある。

9) チョンゴヤペ (ランバイェケ河谷) (Fig. 10) — C —

ペルー最北部近くのランバイェケ河谷の中流部から、一遺跡としてまとまったものではなく、墓の副葬品や非発掘資料として見出だされたものである。墓の場合の出土状況、共伴関係なども知ら

れていない。遺物は金製品が知られているだけで、石彫、アドベ彫刻もなく、土器も不明である。

これら金製品のいくつかには、藪睨みの目をもつへびの頭部(Fig. 10-5)、同様の目と牙のある口、鋭い爪や複雑な組み合わせ文をもつ猫科動物 (Fig. 10-3) など典型的なチャビン特徴が見られる。けれどもその他のものは、たとえば“Staff God”のモチーフではあっても、地方的な表現に変わっていて、顔の描き方も、牙のある口を除いていわゆるチャビンのそれとは大きく異なったものになっている。

したがって、ランバイエケ河谷は“チャビン”のおそらく後半に影響を受けたものと考えられるが、いわゆるチャビン特徴の表現は典型的なものとはいえず、これをもってチョンゴヤペをチャビン遺跡とすることはできない。この地は、従来チャビンの北限といわれていたが、今後、“チャビン”そのものの範囲とチャビンの影響が及んだ範囲とに分けて、もう一度検討し直す必要がある。

10) チカマ河谷 (Fig. 11-1~12) — C —

大型石彫などの彫刻類は知られていない。資料の多くは墓の副葬品であるが、その出土状況、共伴関係、層位など、データの詳細は公表されていない。この河谷下流部の墓からは、大量の土器が発見されており、クピスニケの名で知られている。クピスニケの土器は、いわゆるチャビン文化との関係を強く示すものとしてその発見当初から注目され、発掘者ラルコ・ホイレは、これを根拠としてチャビン文化の海岸起源説を主張した。

土器は、器形が単注口壺、鏡型注口壺および鉢に偏っており、うち鏡型注口壺は精巧なものが大量に出土している。D群、A群の両方が見られる。しかし、曲線様式文はごく少なく、猫科動物やその属性の表現も典型的な“チャビン”のそれとは異なる。特に四角い頭部にときおり牙のある口がたて方向に描かれた猫科動物のモチーフ (Fig. 11-5, 6) はこの地のものの特徴の一つである。一般的にみて、チャビンとされるものはチャビン特徴の要素の抽出といった様相を呈しており、全体的な影響関係ははっきりしない。“チャビン”に関係ある要素だけでなく、階段文や区画刺突文など海岸地域の伝統的なデザインも見られる。階段状の口縁部をもつ鉢は、パコパンパの先チャビン期の文化に典型的に見られるものであり、クントゥル・ワジでも出土が知られている (Fig. 9-9)。

土器の他、石製品も若干見つかっている (Fig. 11-11, 12)。それらは猫科動物とおそらくへびの頭部と思われるが、藪睨みの目も鋭い爪もない。しかし、口には牙をもち、ときに圏点文もみられる。

これらの資料からみると、先チャビン期も含めて様々な時期のものが混在しているようである。“チャビン”の影響はおそらくその後半のものと思われるが、一方この地独自の特徴も明瞭に認められる。資料不足のため遺跡の分類には議論の余地があるが、いまのところ、これをチャビン遺跡とすることはできない。チカマ河谷の編年をまず整備する必要がある。

11) カバヨ・ムエルト (モチエ河谷) (Fig. 11-13~15) — B —

本遺跡はモチエ川の3 km 北、海岸から約17 km 内陸に位置するマウンド群である。ここではそれらのうちの中心的なマウンド、ワカ・デ・ロス・レイエスの発掘資料に基く。

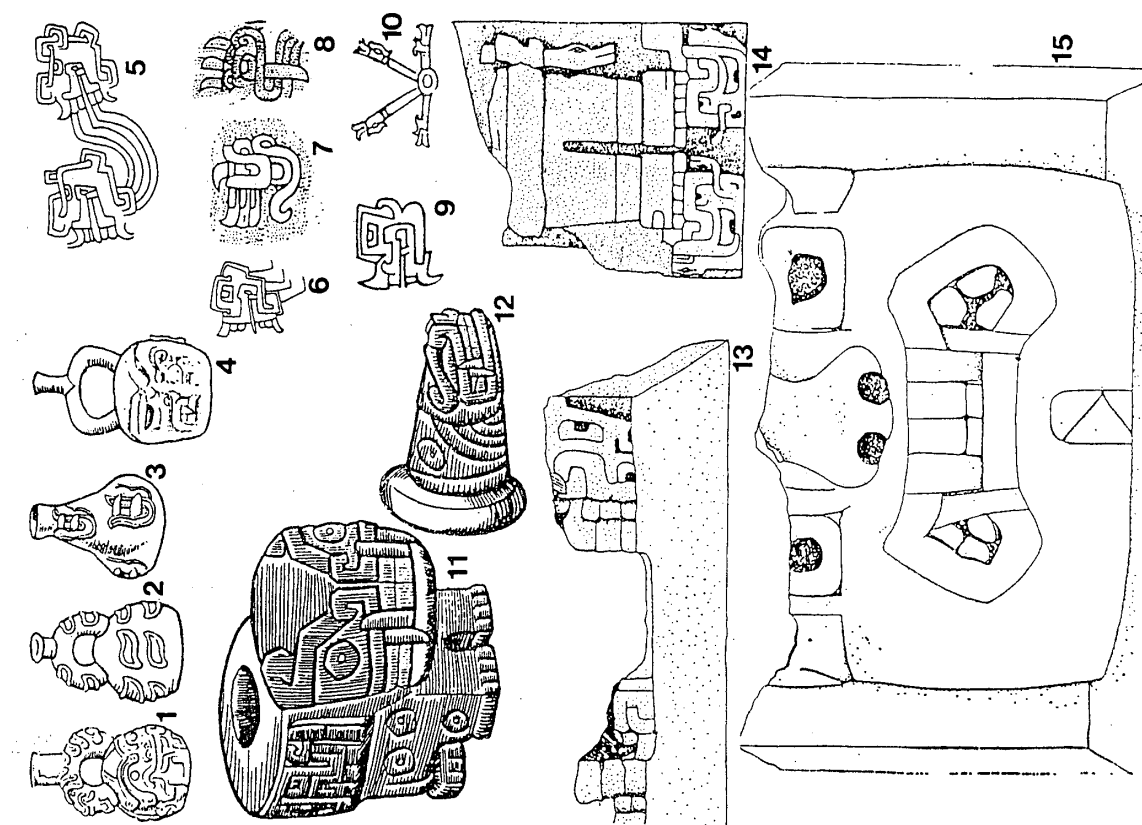


Fig. 11 チカマ河谷I~12 カバヨ・ムエルト13~15

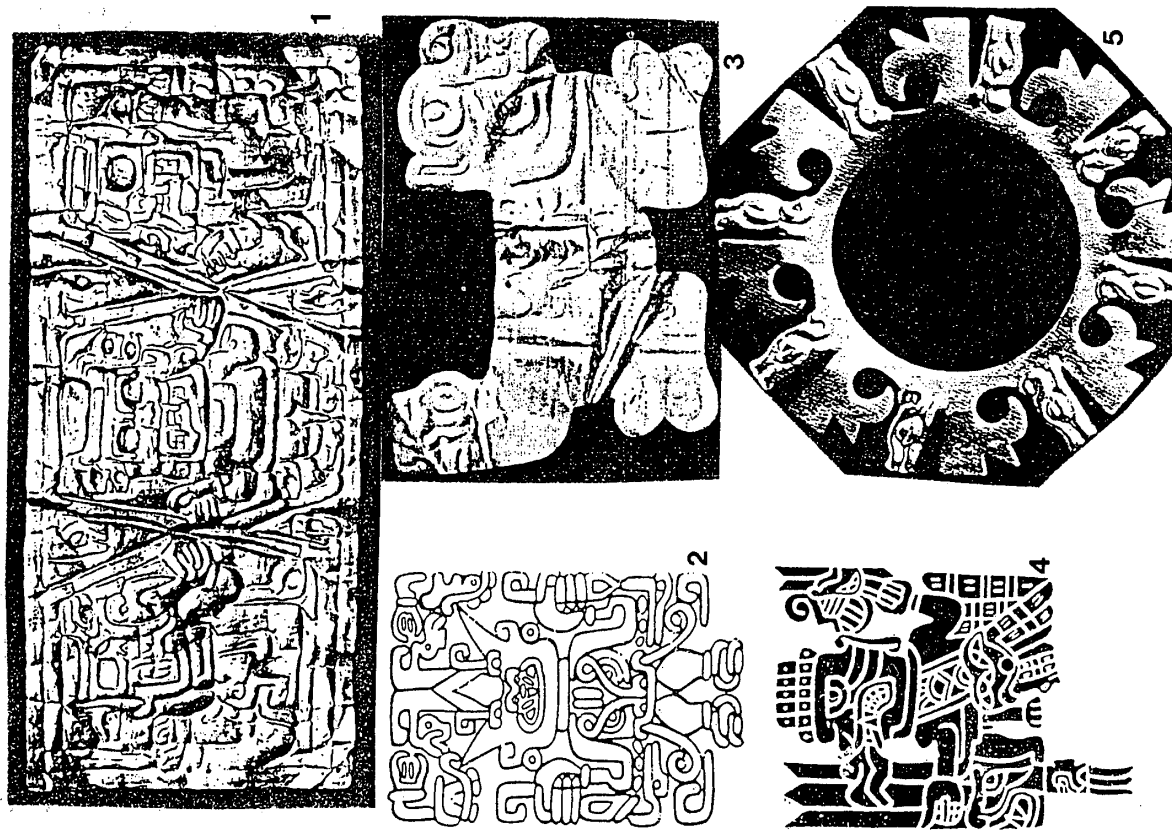


Fig. 10 チョングゴヤベ金製品

ここでは、プラットフォーム上の壁面に、石彫ではなくアドベ彫刻が発見されている。それらのモチーフや表現は、顔がより人間的ではあるが、典型的な“チャビン”といえる。そのうちのいくつかは、倒置でも文様になる独特の描き方をされているが、これはチャビン・デ・ワンタルのライモンディ石彫 (Fig. 3-1) の大きな特徴の一つである。また、下向きに据えられた顔もあるが、このような配置は、カスマ河谷のセロ・セチン遺跡の石彫に典型的にみられるものである。(Fig. 14-1)。

土器はよく知られておらず、量も少ないようである。区画内刺突や階段文など先チャビン期の土器が主体であるが、中には押捺圈点文などチャビン期のものも若干みられる。石器のいくつかは他地から持ち込まれたものともいわれる (Pozorski '76)。

これらから、カバヨ・ムエルトはおそらくチャビン遺跡とすることができるが、その根拠は主にアドベ彫刻によっているので、今後より多くのデータ、特に土器に関するデータによる確認が必要である。また、モチェ河谷の編年自体も十分に整っていないため、地方文化といわゆるチャビン文化との関係も明らかではない。

12) セロ・ブランコ (ネペーニャ河谷) (Fig. 12-1, 2) — A —

ネペーニャ川左岸、海岸から 16km 内陸に位置するマウンド遺跡である。

石彫はないが、多彩色のアドベ・レリーフが発見されている。デザインは、藪睨みの目、牙をもつ口、および鋭い爪の連続文で、タイプ 1 に分類される。土器についての詳細は知られていないが、わずかな図示資料の中には D 群の曲線様式文や高度に磨研された単色の土器片が散見される。

セロ・ブランコは、チャビン遺跡の一つであり、おそらく“チャビン”の前半期からのものといえる。しかしながら、本遺跡の先行文化や、この地方の編年あるいは文化変遷がいまだによくわかっていないため、地方文化とチャビン文化との関係は定かではない。

13) プンクリ (ネペーニャ河谷) (Fig. 12-3, 4) — C —

セロ・ブランコ遺跡の約 10km 上流、海岸から約 27km 内陸に位置するマウンド遺跡である。

石造建築の壁の上にアドベ・レリーフが描かれているほか、階段の中央部に猫科動物の上半身のアドベ像が発見された。像の下からは、石臼、磨石および、トルコ石やストロンブスの装飾付きの布片を伴った女性の埋葬が発見された。猫科動物の表現は“チャビン”のそれよりもリアルである。口には牙があり、鋭い爪ももっているが、目は藪睨みになっていない。また、もう一点の像 (Fig. 12-4) は、鳥といわれているが、その目や口の表現をはじめ、組み合わせられている要素も海獣、サルや階段文など、“チャビン”のものとは異なり、むしろ海岸の特徴が多く見られる。

プンクリは“チャビン”の影響を受けたとすることはできるが、チャビン遺跡とはいえない。今後、“チャビン”との関係だけでなく、この地の編年の整備やその中での位置付け、ネペーニャ河谷内や隣接河谷内の諸遺跡との関係など多くの課題を扱っていくためにも、資料の集積が急がれる。データ不足のため、この河谷内でセロ・ブランコとプンクリのどちらが“チャビン”にとって重要だったのか決定することができないが、上述の資料からみるかぎりでは、典型的なチャビン特徴を

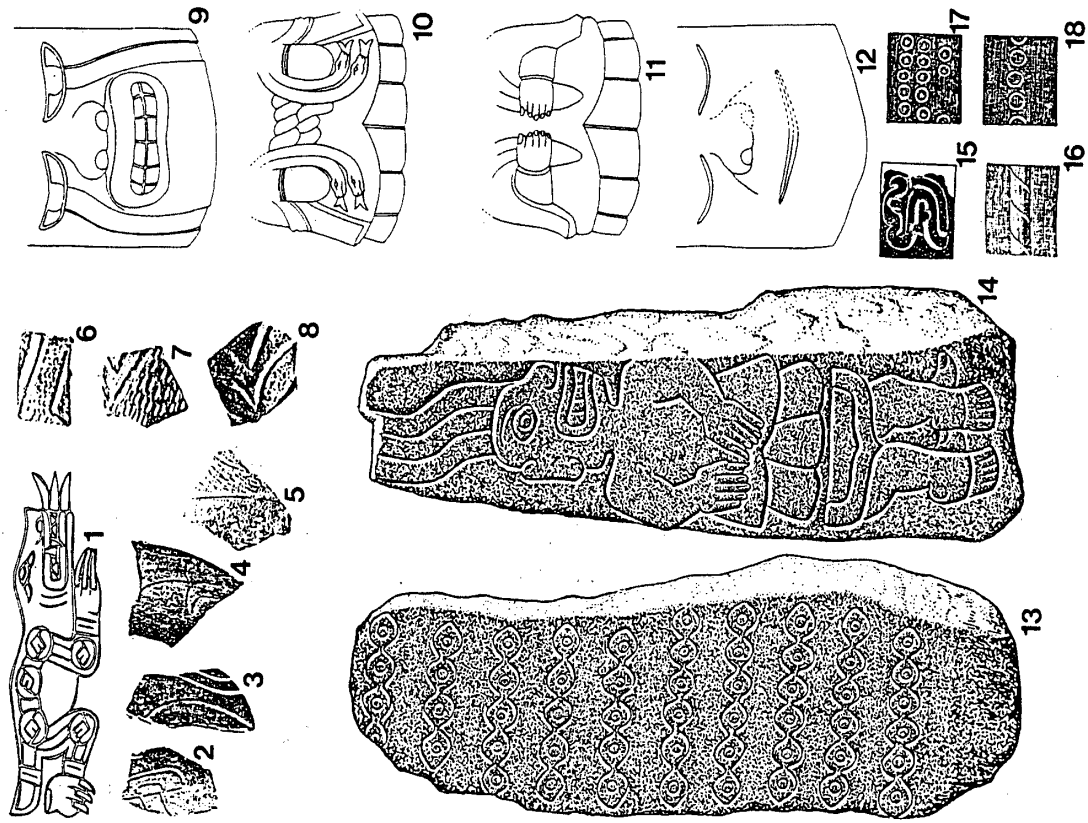


Fig. 13 カスマ河谷：パユカ1~8 パンバ・デ・ラス・ヤマ
スーモヘケ9~12 セロ・セチン13~18

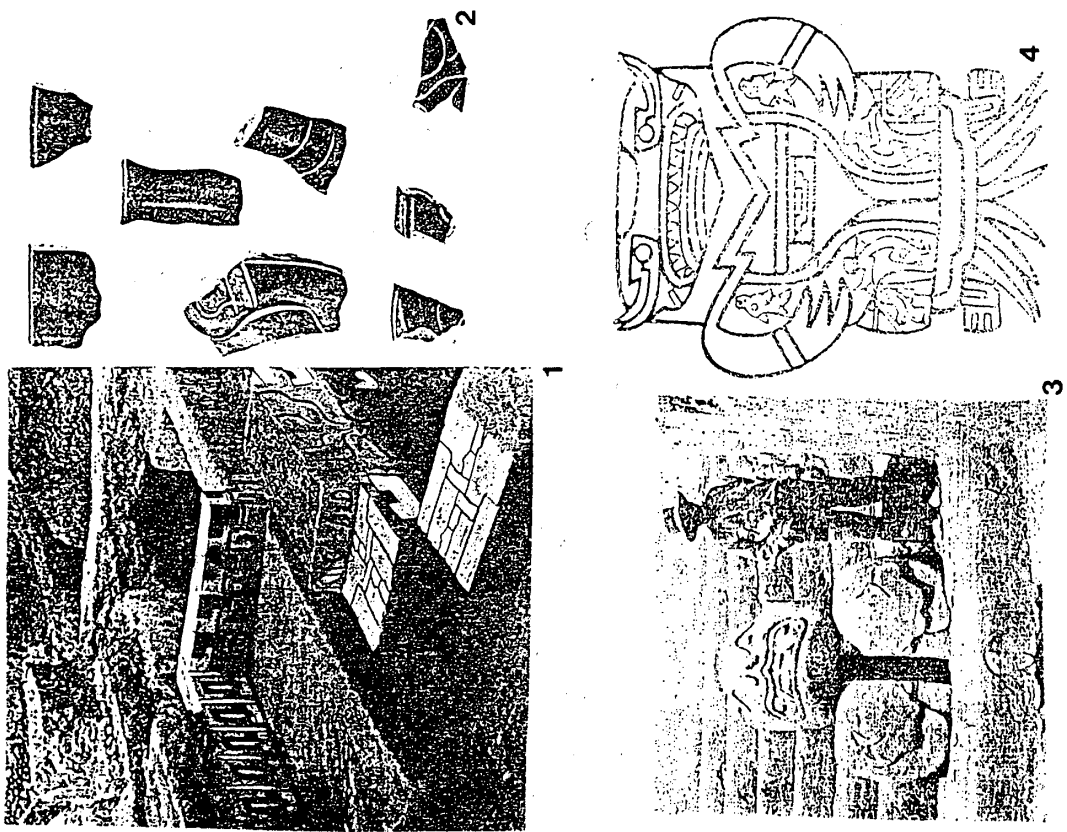


Fig. 12 ネペーニヤ河谷：セロ・プランコ1.2 プンクリ3.4

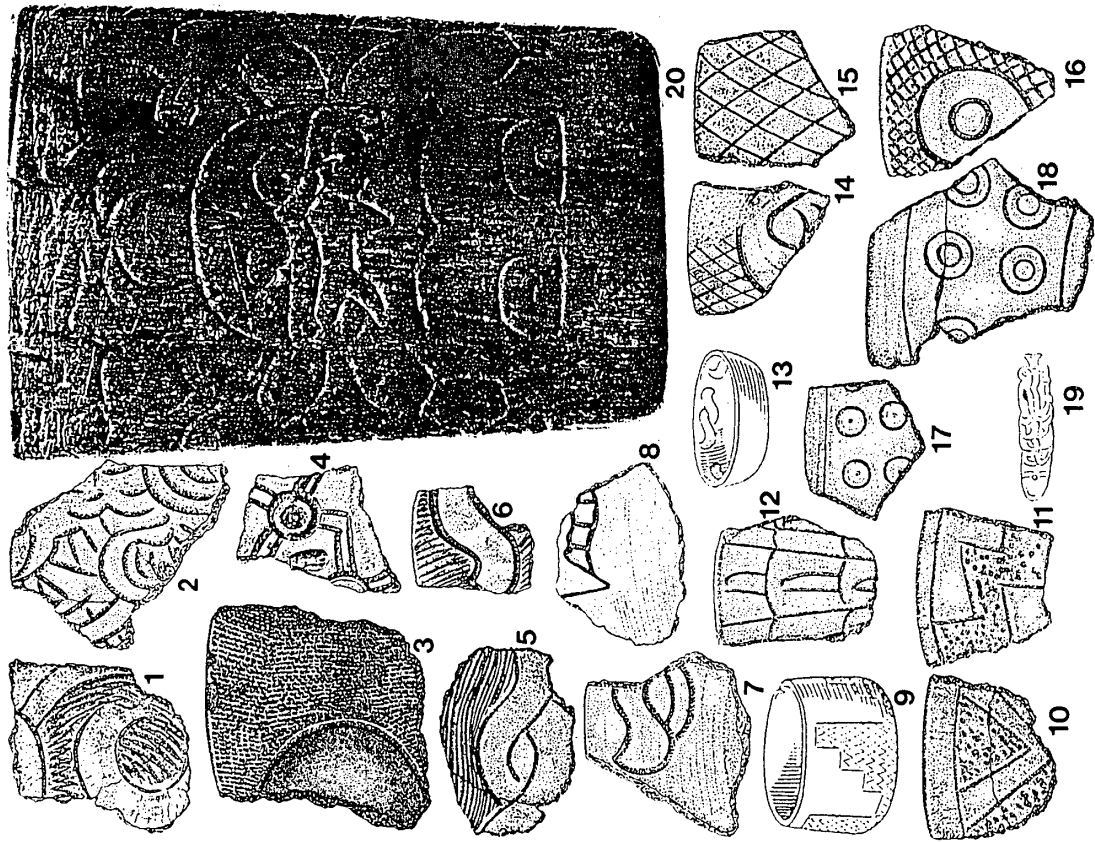


Fig. 15 アンコン・スーペ出土遺物

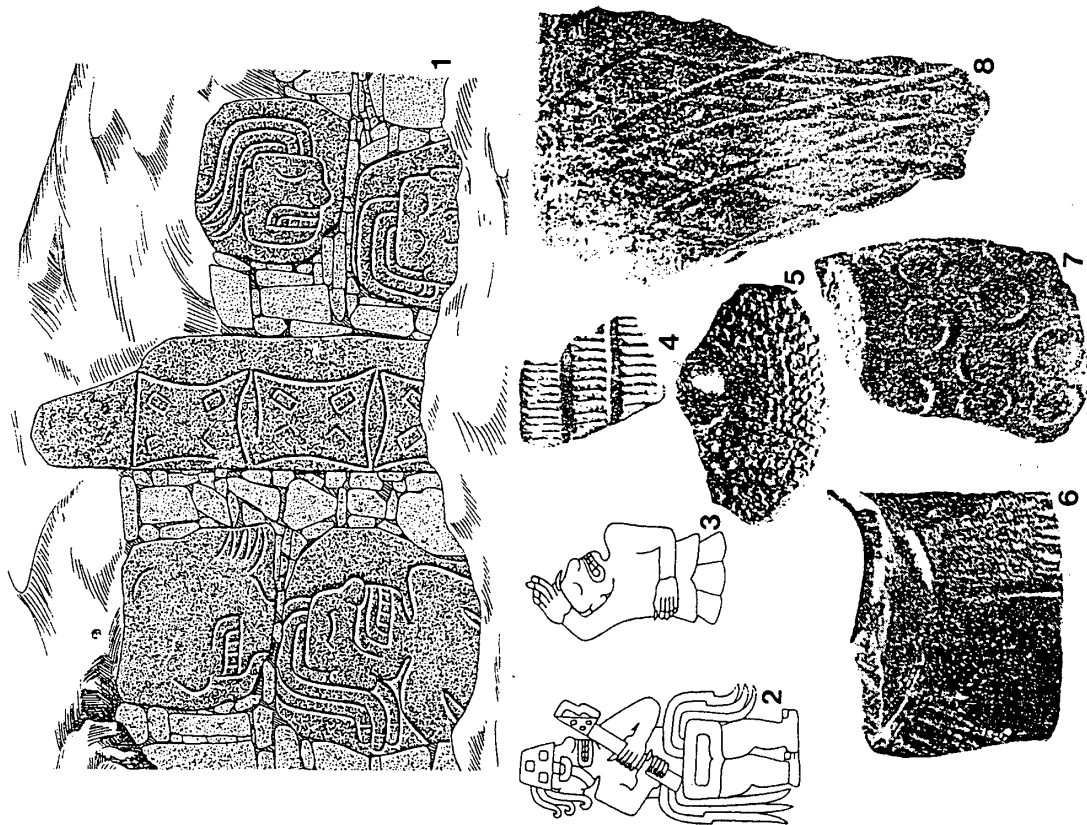


Fig. 14 カスマ河谷：セロ・セチン1~3 アタウラ4~8

みせているセロ・ブランコの方が有力と思われる。

14) セロ・セチン (カスマ河谷) (Fig. 13-13~18, 14-1~3) — C —

カスマ川とその支流セチン川の合流点近く、標高約 100m に位置し、海岸から 13km ほど内陸に入る。背後に大きな丘が迫っており、遺跡はこの丘の土砂崩れによって埋没していた。

本遺跡では、古神殿を取り囲んで石彫が多数発見された。しかし、そのテーマはチャビン彫刻のそれとは大きく異なる。テーマの多くは戦士 (Fig. 14-2), 死者 (Fig. 13-14, 14-1, 3) および頭、腕、足、目 (Fig. 13-13), 脊椎 (Fig. 14-1) など人体の一部で、いずれもかなり写実的に描かれている。口には牙がなく、猫科動物の鋭い爪もない。藪睨みの目は戦士以外には見られない。しかし、顔の表現の中にはチャビン石彫のタイプ 3 (Fig. 3-8, 9) に比定できるものがある (Fig. 13-14)。タイプ 3 の石彫はチャビン・デ・ワントルでもまれで、チャビン・デ・ワントルの外では本遺跡のものが唯一の出土例である。また、目を列状に配したモチーフがあるが (Fig. 13-13), 同様のモチーフはチャビン・デ・ワントル出土の石彫 (Fig. 2-3) にも見られる。しかし、後者が藪睨みなのに対して、前者は同心円状になっている。

セロ・セチン遺跡内での文化変化はいまだによくわかっておらず、特に古神殿を代表とする早い時期の文化は、建造物に伴う土器がまだ発見されていないため、編年の整備も遅れている。古神殿よりも上方の層から発見された土器には、D群とA群の他に形成期下層前半 (草創期) の海岸の土器も混じている (Pozorski & Pozorski '87, P. 81)。

セロ・セチンは、“チャビン”と何等かの関係があったと考えられ、またチャビンに先行してその成立に関与していた可能性がある。しかし、両者の関係の性質はよくわからず、編年上の位置付けについてもまだ議論すべき点が多々ある。セロ・セチンでは地方伝統がかなり根強く残り、“チャビン”の成立後もしばらく独立性を保持したが、おそらくその後重要性を失うなど変容を余儀なくされたものと思われる。このような状況はパコパンパと似通ったものといえるかもしれないが、その検討にはより多くの、かつ、質の高いデータの集積が必要となる。

15) パンパ・デ・ラス・ヤマスーモヘケ (カスマ河谷) (Fig. 13-9~12) — D —

この遺跡は、カスマ川下流域に並ぶ旧パンパ・デ・ラス・ヤマスとモヘケの 2 遺跡が、ポゾルスキーの最近の調査で、互いに近接していることや建造物や遺物が類似していることを根拠に一つの遺跡とみなされ、この名が冠されたものである。海岸から約 18km 内陸に位置し、標高はおおよそ 150m ある。

石彫はないが、プラットフォームの壁に設けられた大きなニッチの中にアドベ彫刻が発見された。それらは、猫科動物ではなくヒトの顔や胴部であり、猫科動物の属性はまったく見られない。しかし、目の下にたてに描かれた帯 (いれずみ?—Fig. 13-9) や閉じた目 (死者?—Fig. 13-12) など、セロ・セチンの石彫 (Fig. 14-1~3) に類似した表現も認められる。それゆえ、本遺跡のアドベ彫刻はチャビン彫刻とはいえない。その全体の立体的な表現は、カバヨ・ムエルトやプンクリのアドベ彫刻との類似を指摘できるが、これは、アドベで作られた像に共通の特徴なのかもしれない。

中央アンデス形成期文化の研究 (II)

土器はこれまでのところよくわかっていない。形成期下層前・後半期のものが若干紹介されているにすぎない (Pozorski & Pozorski '87), その他の遺物としては, モチュエ河谷からネペーニャ河谷まで海岸に広く分布している石製容器が, 本遺跡でも出土している。そのうち一点には, A群に似た様式文が描かれている (同上 Fig. 19)。

本遺跡の時間的位置付けは, 現今の資料ではきわめて困難であるといわざるをえない。アドベ彫刻に基けば, 猫科動物の属性がないことやセロ・セチンとの類似は, 本遺跡の先チャビン期の成立を示唆しているようでもあるが, 一方, チャビン遺跡との類似は本遺跡からの影響の結果とできるか……。いずれにしても, 現今のデータからは, “チャビン” との関係はきわめて疑わしい。

16) パユカ (カスマ河谷) (Fig. 13-1~8) — A —

海岸から約 35km 内陸に入った, カスマ川とマトゥア川の合流点近くに位置するマウンド遺跡である。

石彫もアドベ彫刻も発見されていないが, 骨製品に描かれたワニ (Fig. 13-1) は, 藪尻みの目, 牙のある口, 鋭い爪をもち, テーヨのオベリスクやヤウヤの石彫と強い類似を示す。ワニは海岸起源の動物ではなく, 本来アマゾン地域に生息するものであることから, これの由来は, アンデスを越えた東側地域から入ってきたか, ないしはチャビン・デ・ワントルからの借用または授与によるものではないかと思われる。

土器も, 先チャビン期の特徴も若干みられるものの, D群とA群を含む典型的なチャビン特徴が大半を占める。

したがって, パユカはチャビン遺跡とでき, おそらくチャビン期前半からのものと思われる。しかし本遺跡は, 先チャビン期の成立とはできるものの, その立地, すなわち他遺跡に比べてかなり内陸にあること, 高地につながる2河川の合流点に位置することから考えて, 高地を指向していたように思われる。ポゾルスキーが指摘しているように, その背景にはおそらく高地と海岸の間の交易関係があったものと考えられる。

17) アンコン・スーペ河谷 (Fig. 15) — C —

アンコン遺跡は, リマのすぐ北側, アンコン湾岸に位置する。一方, スーペ河谷では下流域に貝塚, 住居址, 墓などが散在している。共に, マウンドその他の大型公共建造物は知られていない。両遺跡は距離的にだいぶ離れているが, 遺物組成の内容が類似しているとして, 調査者によって単一の “Ancon-Supe Complex” として扱われた (Willey & Corbett '54)。石彫もアドベ彫刻も発見されていない。

土器は, 器形が単純で, D群, A群とも存在するが, 同時に典型的な海岸の先チャビン期のものも見られる。先チャビン期の土器の中には, ワヌコ盆地のそれとの類似を指摘できるものも散見される (Fig. 15-10, 11)。一点の土器に描かれた組み合わせのモチーフ中に藪尻みの目が見られるが, それ以外の要素はチャビンのそれとは大きく異なるものである (Roe '74 Fig. 8)。土器の他にも骨製品などに典型的なチャビン特徴をもつものがある (Fig. 15-19)。

これら両遺跡は大型の彫刻類がなく、その他の資料も限られたものしかないため、“チャビン”との関係の性質についてここで論じることは難しい。しかし、その乏しい資料の中にみられる様式文、組み合わせ文、彫刻のモチーフなどに“チャビン”の影響をみることができる。また、周辺の遺跡や隣接する河谷との関係もよくわからないが、北部や中部の海岸地域と共通する特徴もいくつか認められる (Fig. 15-4, 9)。全体としては、“チャビン”のおそらく前半から影響を受けていたものと思われる。この2遺跡は、先述したように互いにかなり離れて位置しており、たしかに一つの文化複合と認めてよいのか、今後検討していく必要がある。また、もしそれが認められるならば、なぜこの文化がこれほど広範囲に一樣に分布するのか、説明されなければならない。

18) ガラガイ (リマック河谷) (Fig. 16, 17) — C —

本遺跡は、首都リマから北東へ約 14km、海岸から約 12km 内陸に位置する大型のマウンド遺跡である。

プラットフォームの壁にアドベ・レリーフが発見された。そのうちのいくつかの像は牙のある口や藪睨みの目をもつが、その他は目は閉じるなどしていわゆるチャビン特徴とは異なる表現になっている。また、これらの像はいずれも猫科動物ではなく、鳥や虫のような生物あるいは円形の抽象的なもので、鋭い爪は描かれていない。この遺跡では、マウンド中から泥粘土に彩色された人形が布にくるまれ袋に入れられた状態で掘り出され (Fig. 16-1, 2)、“ofrendas” (供物) と呼ばれている。これらも、牙をもつ口はあるが、その他にはチャビン特徴といえるものはみられない。

土器は、D群、A群共にあるもののごく少量である。これらの他には、典型的な海岸のもの (Fig. 17-5~9) を含めた先チャビン期の土器が大半を占め、中にはワヌコ盆地や北部地域との関係が指摘できるものがある (Fig. 17-1, 2)。

これらの資料からみて、ガラガイは“チャビン”の影響があったとはいえるものの、その地の文化ないしは伝統が強く、“チャビン”からの影響は変形されるかまたは部分的にのみ受け入れられたものと思われる。この地域の文化やその変遷はよく知られていないため、地方文化と“チャビン”との関係の性質もよくわからないが、本遺跡はいわゆるチャビン特徴が顕著にみられないことから、チャビン遺跡とはできない。

19) カルワ (南部海岸) (Fig. 18-1) — C —

南部海岸のピスコ川とイカ川のあいだの砂漠地帯で発見された墓群である。石彫もアドベ彫刻もなく、土器も、チャビン期後半のものに関連し、パラカス土器が共伴したということ以外に、詳細は知られていない。

この墓群の中の一つの墓は他のものと違って大型の長方形を成し、中から 200 片を超える織物 (片) が発見された。それらの多くには、牙のある口、鋭い爪、藪睨みの目をもつ半獣半人の像や、複雑な組み合わせ文が染められている。その中には、チャビン特徴の一つ“Staff God”のポーズをとるが、体部の表現から女性を表したとみられるものがある (Fig. 18-1)。先にもふれたように、バーガーはこれを“Staff Goddess”と呼んで、チャビン・デ・ワンタルの主神格の一つライモンデ

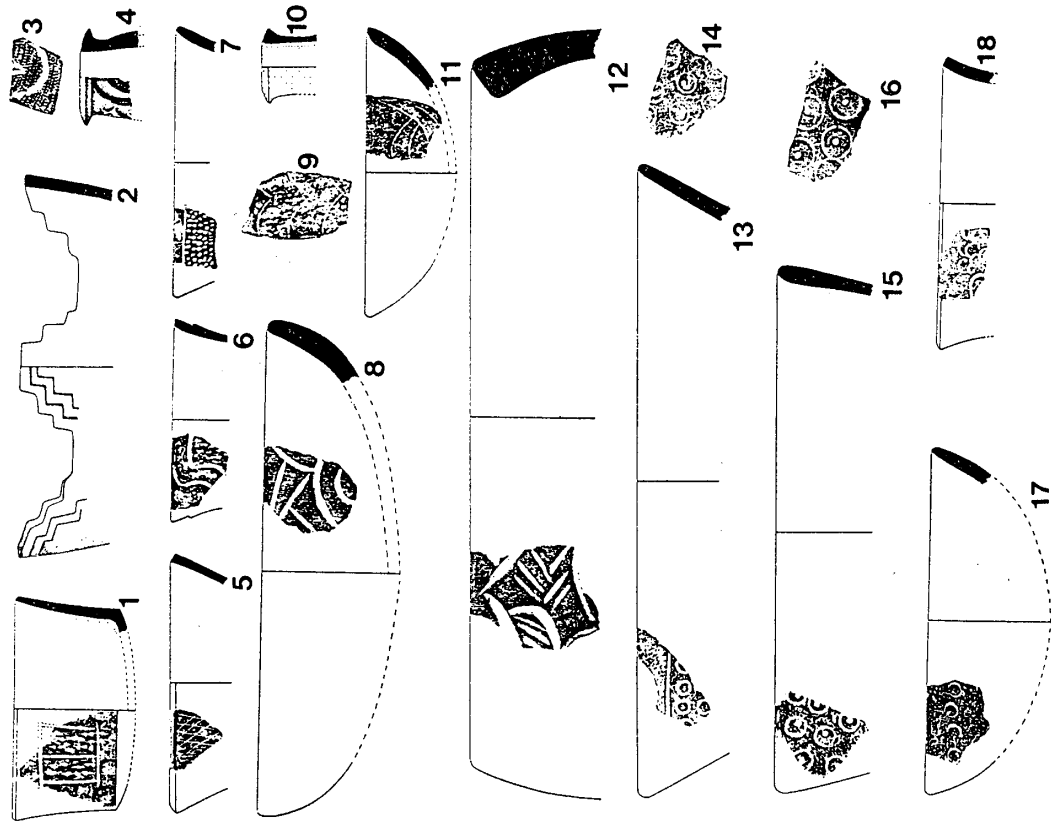


Fig. 17 ガラガイ出土土遺物

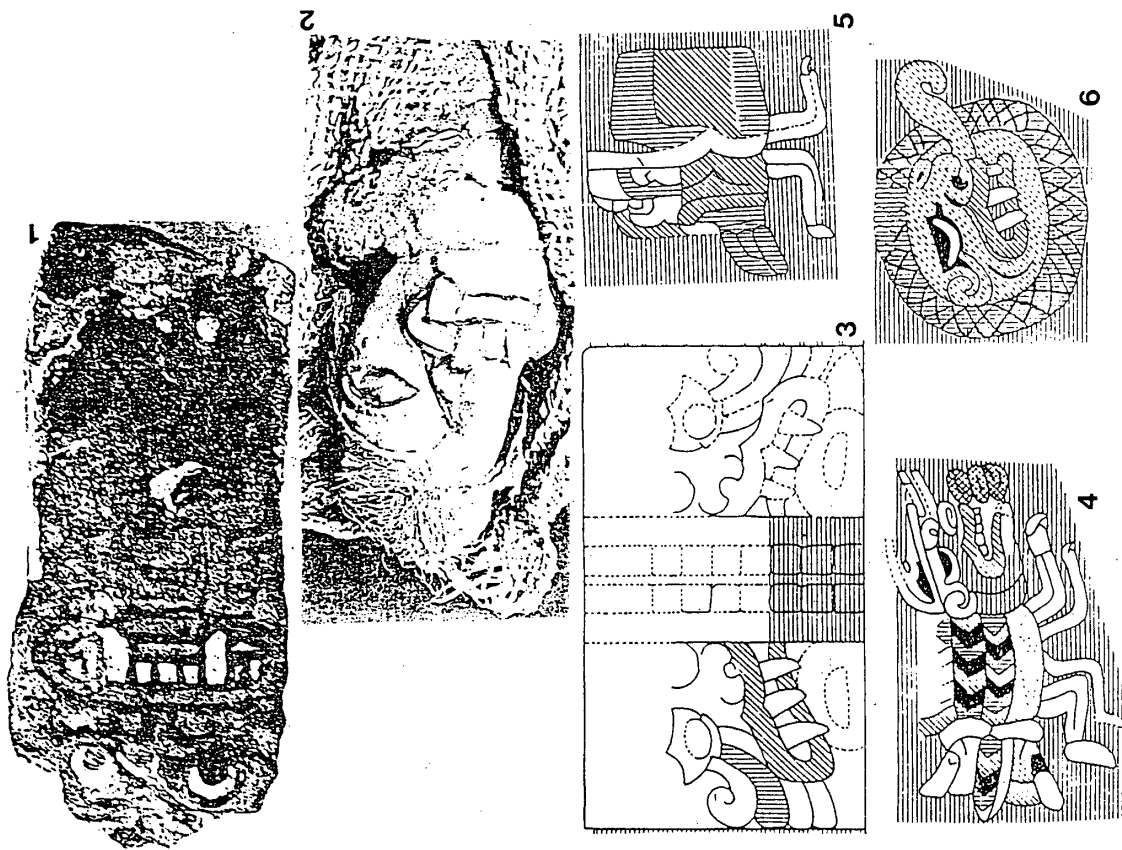


Fig. 16 ガラガイ：泥人形（供物）1.2 アドベ・レリーフ3~6

ィの妻または娘の地位を与えられたものとする一方、北部山中のパコパンパの資料とも比較して、これら2遺跡とチャビン・デ・ワントルとの特殊な関係を示唆している (Burger '83 P. 121)。カルワの像はそのポーズ、目や口の表現からチャビン期後半に比定でき、ライモンディの位置付けとも符合する。モチーフの中には時折綿玉やサボテンが描かれていることがあり、また、“Staff” (杖) も植物になっていることから、これらの神格は植物栽培、特にワタと関連するものと思われる。生業に関しては、一般に、チャビン期にはトウモロコシを中心とした農耕が確立していたとされるが、これらの織物には明確なトウモロコシの表現は見られない。

カルワは織物に基いて“チャビン”と関係があったとできるが、他の文化要素が不明であるため、チャビン遺跡か否かは決定できない。その関係の性質もいまだ推量の域を出ないが、単に影響を受けたというだけではなく、何らかの同盟関係のようなものを結んでいた可能性もある。これらの織物はそのような関係のシンボルとして製作されたものかもしれない。これらがどこで作られたのが問題になるが、それに関するデータは知られていない。遺跡自体が墓だけなので、今後、周辺の居住址などの諸遺跡の資料と合わせて検討していく必要がある。また、チャビン・デ・ワントルとの特殊な関係が特定の人物またはその家族に限られるのか、あるいは共同体全体におよぶものなのかも、いずれ議論の焦点になろう。

20) カヤンゴ (南部海岸) (Fig. 18-2, 3)

イカ川の下流域に位置する。公共建造物はおそらくなく、石彫もアドベ彫刻も知られていない。また、土器も記述がなく、詳細は不明である。カルワ遺跡と同様、多くの織物が見つかっている。

そのデザインは、牙のある口、藪睨みの目、ヘビ状の髪、鋭い爪をもつ他、複雑な組み合わせ文もあり、その表現特徴から、カルワと同じくチャビン期後半のものとしてできる。しかし、カルワのような性別の表現はない。

カヤンゴは“チャビン”と関係があったことは明らかであるが、その性質は定かではない。しかし、少なくともカルワの場合のような、強力なまたは直接的な関係ではなかったようである。本遺跡がチャビン遺跡か否かは現在の資料では決定し難く、将来、資料をさらに増やすと共に、カルワやオクカへなど周辺の諸遺跡と比較しながら検討を続けていく必要がある。

21) オクカへ (南部海岸) (Fig. 18-4, 19-1~3) — C —

イカ川中流域に位置する。墓と住居址からなる遺跡で、公共建造物は知られていない。石彫もアドベ彫刻もないが、土器と織物が多数出土している。

土器は10期に分けられ (Rowe, Menzel & Dawson '63), そのうち1~4期がチャビン期後半に並行するとされている (Burger '83 P. 107~110)。器形は碗形と双注口壺が主体で、希に鑿型注口壺もみられる。土器には、牙のある口や藪睨みの目の表現があるものの曲線様式文はなく、猫科動物も写実的で、いわゆるチャビン特徴とは異なるものである。また、チャビン式土器は一般に高度に磨研され単色であるのに対し、この地域の土器は磨研度の低い器面にレジンをういた多彩色のデザインを描くのが特徴である。しかし、中にはA群の典型的な文様を合わせもつものもある (Fig.

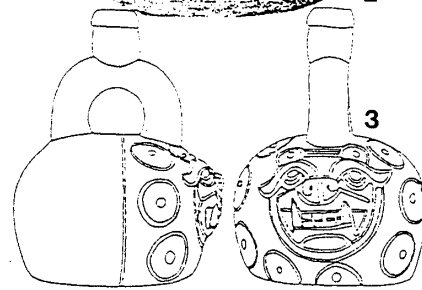
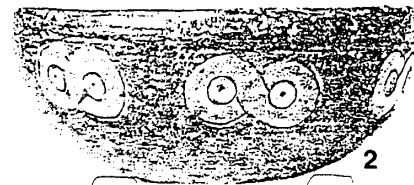
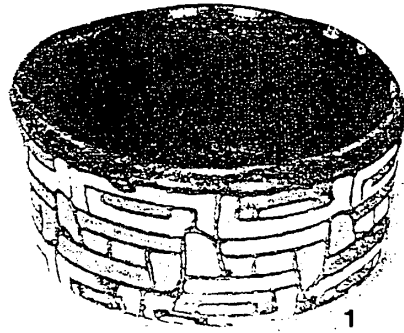
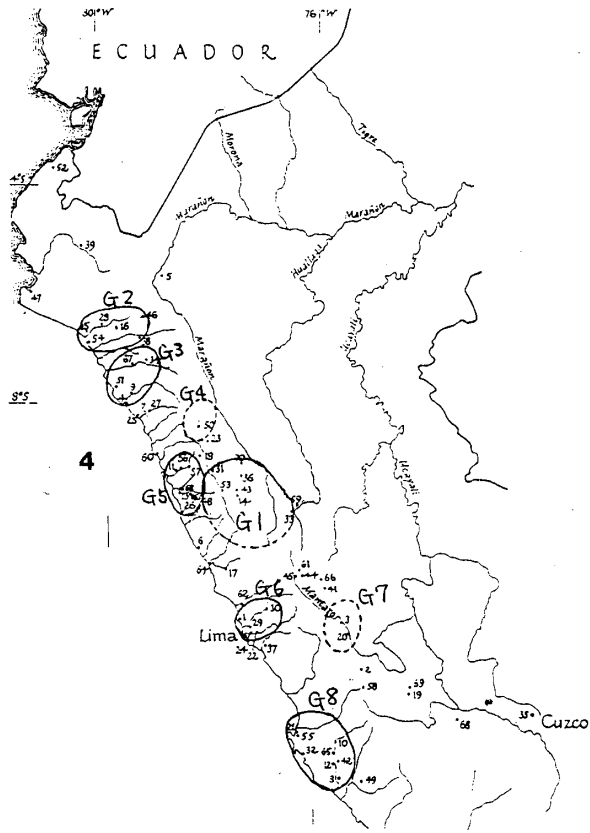
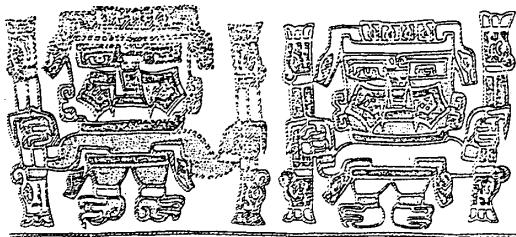
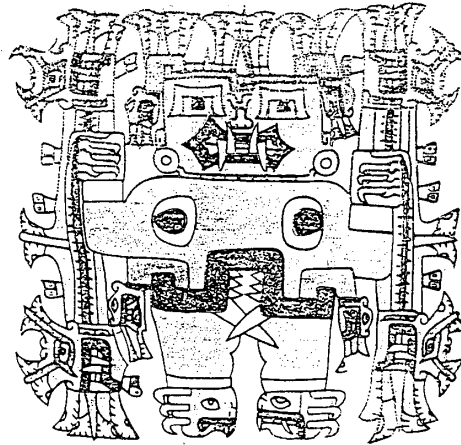


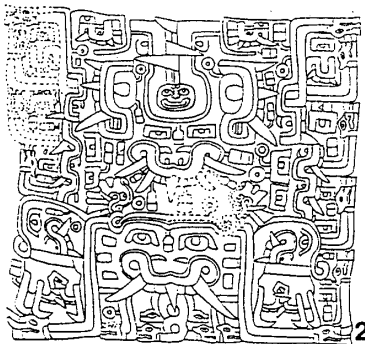
Fig. 19 オクカヘ1~3 文化圏想定図4



4



1



2



3

Fig. 18 カルワ1 カヤヤゴ2.3 オクカヘ4

19-2, 3)。総じて、土器はいわゆるチャビン式土器とはいえない。

織物はカルワやカヤンゴのものによく似ている。Staff God のポーズ、牙のある口、藪睨みの目、鋭い爪、ヘビとの組み合わせ文などチャビン期後半の特徴がみられる。しかし、他のものには表現に様々な変異、変形が散見され、したがって、チャビンそのものというよりは、地方化されたものという印象が強い。

これらから、オクカへでもたしかにチャビン期後半の影響は認められるが、いわゆるチャビン特徴ではなく、地方文化との融合が示唆される。南部海岸は、1940年代にテーヨによってパラカス文化が明らかにされて以来、“チャビン”との関係が土器を中心に議論されてはいるものの、先チャビン期の文化ならびにその変遷がよくわからず、また、北・中部のようにマウンド遺跡などの公共大建造物も知られていないため、いまだ混沌としている。しかし、これら3遺跡の限られた資料ではあるが南部海岸としてある程度まとまった特徴はとらえられる。今後は、これらの分布を追うと共に、周辺地域との関係を細かく見極めていかなければならない。

以上の結果をまとめると、全21遺跡のうち、5遺跡がAに、またBとDにそれぞれ2遺跡、そして残りの12の遺跡がCに分類された。これらの遺跡のカテゴリー別の分布は、Fig. 1 のようになる。これを見ると、チャビン(?)遺跡としたA(○)とB(□)の分布に特徴がみられる。A、B合計7遺跡のうち、4遺跡はチャビン・デ・ワンタルからほぼ等距離に位置してこれを囲むような半円形をなし(33, 70, 31, 48)、また他の3遺跡はそれぞれ異なった地域に位置している。すなわち、北部高地(34)、北部海岸北部(7)、北部海岸中部(11)である。またこれら3遺跡のまわりには、他の遺跡が集まっているのがわかる。一方これらの他にも各地に遺跡のクラスターがみられ、カテゴリーCの遺跡がその中に点在している。すなわち、北中部高地北部(50)、極北部高地(46)、極北部海岸、北部海岸北部、中部(56)、南部、中部高地(3)、中部海岸(24)および南部海岸である。これらの遺跡のクラスターは、その分布と主要遺跡の内容に基いて、いくつかのグループにまとめることが可能である。

まず、チャビン・デ・ワンタルを囲むような分布をみせる第一のグループは、いわゆる“チャビン”のおおよその範囲を示しているのではないだろうか(Fig. 19-4: G1)。4遺跡のうち、ワリコトを除いて他はいずれも典型的なチャビン特徴である曲線様式文や神格と考えられるデザインを有し、チャビン期前半(D群相当期)のチャビン・デ・ワンタルとの直接的な関係を示唆する。ワリコトでは、チャビン期後半に相当するチャビン特徴ははっきり認められるが、前半に関しては出土資料も少なく、典型的なチャビン特徴もはっきりしない。しかしこれを除いても、チャビン期前半には“チャビン”はおおむねこの範囲ぐらゐまでその分布を広げていたものと思われる。したがって“チャビン”は、北部高地中部から南部まで、また一部の海岸河川の上流部からアンデス山脈東斜面までを何等かの形で掌握していたことになる。また、これらの遺跡がチャビン期後半になってもチャビン遺跡として重要性を失わなかったことは、ヤウヤを除いて“Staff God”や円・圏点文

他の押印捺文等、A群の土器が典型的に存在することなどから確認できる。

他地域については北から順にみていくことにする。中央アンデス極北部は海岸から高地まで一応ひとまとめにできる(同G 2)。すなわち、パコパンパとチョンゴヤペがこれに含まれる。両遺跡とも、地方化された、ないしは変容した“Staff God”を特徴とする他、トグロを巻いたへびのモチーフや半人でない比較的写実的な猫科動物像を有している。“Staff God”は、チャビン・デ・ワントルのライモンディと比定可能なことから、チャビン期後半の特徴とできる。実際、パコパンパでは押捺圏点文などチャビン期後半の土器はかなり多いが、曲線様式文など前半の土器がみられない。この地域の中で、特にパコパンパは“チャビン”との関係が問題になるが、これは次章でふれる。

その南はクントゥル・ワシからチカマ河谷までを一括できる(同G 3)。この地域では、チャビン特徴の一つである牙をもつ口が、顔に対してたてに描かれたり、チャビン特徴の要素を抽出して土器などに描かれるのが特色である。目や口の描き方からみて、チャビン期後半の特徴は認められるが、前半のものははっきりしない。このたて方向の口が描かれていたと想定される土器がチャビン・デ・ワントルのD群相当層から出土している(Fig. 4-9)。確認を要するものである。この南、モチェ河谷のカバヨ・ムエルトをこれに含めるか、あるいは独立したグループを成すとするかは、現今の資料では決定し難い。アドベ・レリーフのモチーフや描き方は、さらに南のネペーニャ河谷やカスマ河谷のものとの類似が指摘できるが、この付近には他に比定可能な資料がない。また、カバヨ・ムエルトでは土器の出土量がきわめて少なく、いまだ比較は難しい。その中にみられるものは先チャビン期を主体としているが、チャビン期のものも散見されるようである¹⁾。その決定にはもう少し資料の増加を待たなければならない。

これより南のビルー河谷、サンタ河谷では、これまでのところ“チャビン”との関係を積極的に示す証拠が発見されておらず、一種の空白地帯となっている。

サンタ河谷の東奥にラ・パンパ遺跡があるが、この遺跡は他地域のいずれの遺跡ともつながりを見せず、単独で1グループを形成する(同G 4)²⁾。これまでのところ、基本的にはチャビン期後半が主体である。

その南の海岸部には、ネペーニャ河谷とカスマ河谷、二つの遺跡集中部があるが、これらは一つのグループとみなしうる(同G 5)。両河谷の代表的なチャビン遺跡、セロ・ブランコとパユカではチャビン特徴の目や牙がアドベ・レリーフや彫刻類、土器に描かれ、土器にはさらに曲線様式文もみられる。これらの特徴はいずれもチャビン期前半のもので、これらの遺跡が早い時期から“チャビン”と結びつきがあったことを示唆している。しかし、このグループの中で、ネペーニャ河谷のプンクリとカスマ河谷のセロ・セチンは他遺跡と異なり、“チャビン”との関係は問題が多い。このグループは、距離的にもチャビン・デ・ワントルを中心とするG 1と最も近く、両者の関係は今後さらに議論、検討を重ねていかななければならない。

海岸部では、その南に空白地帯があり、スーペ河谷の遺跡群が現れたあと、ふたたび空白地帯を

狭んで中部海岸中部に入る（同G 6）。このグループの特徴は、彫刻類に見られる猫科動物の口の表現ならびに土器に描かれた曲線様式文と刺突を不規則に充填した刻線文にある。しかし、典型的なチャビン特徴はチャビン期後半のものである。

一方高地では、マンタロ河谷沿いのアタウラを中心とした地域が1グループを成す（同G 7）。この地域の形成期の資料は公表されたものが少なく、その実態は詳らかではない。チャビン期前半の特徴も見られるが、典型的なものではない。後半の特徴はより明瞭に認められる。

南部海岸のカルワ、カヤゴ、オクカへは全て1グループにまとめられる（同G 8）。この一帯では、“Staff God”などのチャビン特徴が、彫刻ではなく織物に描かれること、および多彩色の土器が大きな特徴である。描かれる文様はチャビン期後半のものであるが、かなり変容している。

このように、チャビン期の中央アンデスには、少なくとも8つの“地域”ないしは“文化圏”と呼べるものが想定できる。このうちチャビン期前半からチャビン遺跡としての存在が考えられるのはG 1とG 5である。すなわち、“チャビン”はその当初は北・中部境界付近の限られた地域にのみ分布していたものとしてできるのである。残りはチャビン期後半になって“チャビン”との関係が明瞭になるが³⁾、それらはクントゥル・ワンを除いてカテゴリーCの遺跡である。すなわち、“チャビン”はその後半になってから拡大しはじめ、影響を中央アンデスのほぼ全域に広げたが、実態は地域毎に様々であった。そのほとんどはチャビンの影響を受け、あるいはチャビンと何等かの関係はもちながらもその地の伝統を強く残し、“チャビン”に完全に組み込まれることはなかったといえる。かくして、これら8つのグループはそれぞれ独自の伝統をもつ、互いに独立した一種の“自治体”であったと考えることが可能となる。このそれぞれが、どの程度のまとまりをもっていたのか、どこにその中心があったのか、遺跡間のヒエラルキーはどうだったのか、自治体間の関係はいかなるものだったのか、なぜ互いに独立していながらチャビンの影響をほぼ同時期に受け入れたのか、などは今後追求されなければならない問題であるが、その中で、チャビンの出現と拡大に関連する地域間関係について、次に考えてみることにする。

Ⅲ. “チャビン”の出現と拡大の背景、および地域間関係

これは別稿で論ずることになるが、先チャビン期、すなわち形成期下層にはすでに先述したものとほとんど変わらない“文化圏”が想定できる。その中にチャビン・デ・ワンタルがいわば忽然と姿を現わしたわけであるが、チャビン文化圏（G 1）が形成された後のチャビンの拡大の仕方は、中心から周辺へと同心円状に広がっていくものではなく、チャビン、デ・ワンタルと各地域との直接的な接触の方がより強かったように思われる。たとえば、“Staff God”は極北部のG 2と最南部のG 8に顕在しているのに対し、そのあいだの地域ではこれがはっきりしない。このように地域毎のチャビンとの結びつきをみていくと、上述の21の遺跡のうち、興味深い内容を示すものが4つほどある。すなわち、ワヌコ盆地、パコバンパ、セロ・セチン、およびカルワである。

チャビン特徴の要素の中には、猫科動物、ワニ、マニオクなど、熱帯の動植物がいくつかみられる。これらは産地からチャビン・デ・ワンタルに直接持ち込まれることも可能であるが、ワヌコ盆地など、アンデス東側斜面上の地域を経由してもたらされたことも充分考えられる。コトシュ遺跡の先チャビン期、コトシュ期の土器には、刻線と刺突で描かれた猫科動物のモチーフ (Fig. 6-1) や海産のホタテ貝のような貝⁴⁾を描いたものがある。猫科動物の描き方は、後のチャビン期のそれ (Fig. 6-10) とは大きく異なっている。猫科動物のモチーフは、シヤコト遺跡出土の骨製品にもみられる (Fig. 6-5)。しかし一方、このようなデザインは、同時期の他遺跡には知られていない。それゆえ、これらは先チャビン期のワヌコ盆地内での独自の発案といえるだろう。この地に熱帯地方や海岸地方の産物があるということは、先チャビン期、少なくとも形成期下層から何等かの資源利用法または交易網がすでに存在していた可能性を示唆しているのではないか。このことは、ワヌコ盆地ですでに先チャビン期から相当量のラクダ科動物やシカの骨が出土していることから首肯できる。これらの動物、特にラクダ科動物は、ワヌコ盆地が位置する“ユンガ”といわれる暑く乾燥の強い環境帯には本来生息しておらず、もっと高い一帯へ行かないと手に入らないものである⁵⁾。また、前稿、前章で述べたように、コトシュ期の土器 (GvB-1) と類似の器形、文様がチャビン・デ・ワンタルのB群にみられる。これらの点を考え合わせると、ワヌコ盆地の先チャビン期文化が“チャビン”の成立に関与していた可能性はかなり高いと思われる。このことはまた、“チャビン”の成立に関してアマゾン地域とアンデス地域の間に密接な関わりがあったことをも暗示しているようである。

一方、チャビン特徴の一つに複雑な組み合わせ文がある。典型的なチャビン特徴では、これはいわゆるチャビン要素が組み合わせられている。パコパンパの先チャビン期には、そのようなチャビン要素の組み合わせではないようであるが、複雑な組み合わせモチーフがすでに認められる (Fig. 8-2)。写真の状態が悪く詳細はわからないが、いくつかの要素が組み合わされているのはわかる。また、もう一つ重要なチャビン特徴である“Staff God(dess)”もパコパンパに存在している。しかし、この“Staff Goddess”はいわゆるチャビン特徴の要素を完全に備えておらず、“地方版”といった感が強い。すなわち、パコパンパではチャビン特徴の一部はすでに先チャビン期から存在する一方、チャビン期後半のチャビン特徴は地方的な改変を加えられている、といえる。このことから、パコパンパはチャビンの成立におそらく関与はしたものの、チャビン成立後しばらくは独立を保ち、“チャビン”の影響を受け入れた後もかなりの独自性をもっていたととらえられる。したがって、パコパンパと“チャビン”ないしはチャビン・デ・ワンタルとの関係は、支配、非支配や主従といったものではなく、対等に近い、または“同盟”のようなものだったのではないだろうか。その理由の一つとして重要なのは、天然資源の入手、利用であると思われる。

パコパンパでは、先チャビン期層から海産の貝、ジェット・ミラー⁶⁾、水晶などが出土しており、少なくとも原材料は他地から持ち込まれたものと考えられている (Rosas & Shady '74 P. 23)。パコパンパは中央アンデス文化領域の最北部に位置しており、一方、チャビン・デ・ワンタルとは支

流を介するがマラニョン川を通じて直接つながっている。いわゆるチャビン文化においては特に、エクアドル沖のみに分布するスポンジュラスやストロンブスといった巻き貝が祭祀儀礼上きわめて重要だった。これはチャビン・デ・ワンタル出土の獣神の彫刻が手にこれをもっている (Fig. 2-5) ことから看取される。他方パコパンパでは、チャビン期になって中央アンデス中部山地中のキスピシサを給源とする黒曜石が現れることが知られている (Burger '84)。パコパンパからはより近いエクアドルの給源の黒曜石を用いずにわざわざ遠いキスピシサの黒曜石を入手していたことは、パコパンパの“チャビン”との、または中央アンデス文化領域との強いつながりを示唆しているといえるのではないだろうか。パコパンパはおそらくチャビン期に入ってもスポンジュラスやストロンブスなど北方の産物の重要な中継基地であり、これをマラニョン川を利用してチャビン・デ・ワンタルなどチャビン文化圏にもたらず代わりにキスピシサの黒曜石を入手していたものと思われる。物資の運搬ルートとしては海岸伝いに舟でいく方法もあったであろうが、大河川一本でつながっているという地の利は、内陸のルートの拠点として非常に有利であったと思われるのである。また、この経済的背景があるがゆえに、パコパンパはチャビン期に入ってもかなりの独立性を保てたのではないだろうか。

さて、海岸のセロ・セチンは多数の石彫が出土したことで知られている。これらの石彫は古神殿のプラットフォームを取り囲む回廊の壁面に並んでおり、ポゾルスキー ('87) によって一種の戦勝記念と解釈されている。これらの石彫の中には、チャビン・デ・ワンタルで希れにみられるタイプ 3 と強い類似をみせるものがある他、同心円状と藪睨みの違いはあるが目を列状に配したものもみられる。チャビン・デ・ワンタルのそれには、目の他に海岸の特徴的なモチーフである階段文が重要な要素として用いられていることに注目したい (Fig. 2-3)。セロ・セチンの古神殿や石彫に伴うことがたしかな土器はこれまで知られていない。将来的に発見される可能性もあるが、以上のことを考え合わせると、これらの特徴はチャビン・デ・ワンタルではなくセロ・セチンの方が先行するように思われる。セロ・セチンから直接チャビン・デ・ワンタルにもたらされたものかどうかは別にして、チャビン・デ・ワンタルに存在するモチーフの一部はいわゆるチャビン文化の成立以前にすでにこのあたりの海岸地域に存在していたと考えられるのである。このことは逆に、セロ・セチンの石彫のモチーフに典型的なチャビン特徴の猫科動物がなく、その主要な要素である藪睨みの目、牙のはえた口、カギ爪もほとんどみられないことから首肯できるのではないだろうか。

セロ・セチンは海岸から 13km ほど内陸に入るが、二つの河川の合流点に近く、また付近にはセチン・アルトやセチン・バホなど先チャビン期からの公共建造物とされる建築物があり、遺跡群を形成している。すなわち、この一帯は先チャビン期からかなり発達した様相を呈しており、海岸のすぐ近くに位置するラス・アルダスと物資の交換をしていた (海産物 ← → 栽培植物) ともいわれている (Pozorski '87)。またこれらは前章で想定された G 5 に属するが、この G 5 はいわゆるチャビンの勢力範囲に隣接しており、地理的にチャビン・デ・ワンタルに最も近い。ポゾルスキーによれば、これらの遺跡群がやや内陸に位置するのは河川の氾濫を利用した植物栽培、農耕を志向した

ためであるという。もしそうだとしたら、この地域にはすでに先チャビン期から相当発達した社会が存在していたと思われ、石彫の特徴からみてもこの地域がチャビンの成立に関与していた可能性は充分考えられる。この地域の他の諸遺跡については、調査が不十分で詳細はよくわからないが、先チャビン期に属するものが相当数あるとされており (Pozorski '87)、またたとえ農耕の発達程度はよくわからなくても、セロ・セチンやセチン・アルトのような大規模な公共建造物を造営するには相応の社会的なまとまりが必要だったであろうことは想像に難くない。

それにしても、セロ・セチンの特徴は他に例を見ないものであり、この遺跡の重要性は単に交易や農耕に関するだけではないように思われる。おそらく、戦勝記念と考えられたように何か大きなできごとがあり、セロ・セチンの存在意義はそれと関連していると考えられる。石彫モチーフの描き方からみて、そのできごとに関与したのはたぶんチャビンの人々ではないであろう。しかし、“チャビン”の成立後、セロ・セチンは何等かの理由で以前の重要性を失っていったか衰退していった。その理由は定かではないが、一つの可能性として、さらに内陸につくられたパユカにとって代わられたことも考えられる。

以上の3遺跡がいずれも“チャビン”の成立に関与していた可能性が高いのに対して、カルワの場合はいささか事情が異なる。カルワでは墓から多数の織物片が発見されたが、その主なモチーフは“Staff Goddess”であった。これはパコパンパと共通であるが、パコパンパのものがチャビン特徴の要素を完全に備えていないのに対し、カルワのものはこれをセットとしてもち、典型的なチャビン期後半のモチーフとなっている。土器は図示がないが、オクカヘ（パラカス）のものとされており、もしそれが正しければ、チャビン期後半に位置付けられ、織物の想定時期と符合する。他のデータは知られていないが、200片を越す大量の織物片と土器の記述、またこのあたり一帯ではチャビン期前半相当以前の文化が明らかではないことからみて、カルワの文化は“チャビン”からの影響を受けたもののできるであろう。

織物は典型的なチャビンといえるが、土器はオクカヘのものを見るとかなりチャビンのそれからは変容しており、“チャビン”との関係についてはこれらの資料だけでは何ともいえない。しかし逆にいうと、このことからこれらの織物が何等かの特別な意味をもっていたことが予測される。周辺の他の墓とは形も大きさも異なる一つの墓から200片以上もまとまってでてきているのは、この墓の被葬者（一族）の特殊性（地位、“チャビン”との関係など）によるものかもしれない。これは、チャビン・デ・ワントルとカルワのあいだの広い地域にこのような発見例がないことから支持されるのではないか。もっとも、単にまだ発見されていないだけ、という可能性も大いにあるのであるが……。先述の3遺跡が“チャビン”の成立に関与した可能性が考えられるのに対し、カルワは“チャビン”からの影響は受けたものの、“チャビン”の成立に影響を与えた可能性はきわめて低いのである。大局的に見て、“チャビン”は中央アンデスの北半にその影響範囲が偏る傾向がある。“チャビン”が後半期になって勢力範囲を広げていったその最南端がおそらくこの一帯になると思われる。“チャビン”の南進は、中部高地の黒曜石の一大給源キスピシサの支配と関連があ

るかと思われるが、これについては後述する。

これら四つの遺跡（地域）を地図上でみると、これらはチャビンの影響が及んだ範囲のほぼ東西南北限にあたることに気づく。これらの遺跡はあるいは様々な地域の産物を“チャビン”に供給する一種の中継基地として機能していたのかもしれない。しかし、これを長距離交易のネットワークとして見ると、このようなネットワークはすでに先チャビン期から存在していたと考えられる（別稿）。いくつかの地域を例にとって、他地域から持ち込まれた、または関連すると思われるものを挙げてみると以下ようになる。

極北部高地（パコパンパなど）：海産貝、階段文付土器、押圧文付粘土紐貼付土器（海岸地域より）、直線幾何学文（Rosa Fung '75, LAMINA 3）、外反鉢に類似の器形（東側斜面地域より）、鉱物（含グラファイト？、高地より）

北中部高地（ラ・パンパ、ワリコトなど）：階段文付土器、押圧文付粘土紐貼付土器（海岸地域より）、土器の装飾技法（zoned hatching、焼成後着色など、東側斜面地域より）、ヤマ（高地より）

東側斜面（ワヌコ盆地など）：土器の諸要素（刻文系土器の文様デザイン、技法、器形—別稿）、ジャガーのモチーフ、ピラニアの下顎骨（アマゾン地域より）、ヤマ、鉱物（含グラファイト）、線状磨研文土器、彩文土器（北方の高地より）、海産貝（海岸地域より）

土器特徴のいくつかは海岸から高地に広く分布しているが、これは高地と海岸が河川によって結ばれていることによって説明がつく。他のものは分布が疎らであり、しかも飛び石的である。このような他地産の遺物や文化要素の多様性およびその分布のパターンをみると、中央アンデスの各地域には互いに独立した地方体のようなものがあり、それらは各々周辺環境を独自に利用する一方、一種の交易システムによって他地域と相互関係を保ち、自らの位置する環境帯を越えた広い地域から様々な資源を入手していたのではないと思われる。すでに腐朽してしまった遺物もかなりあろうし、その質量およびネットワークの大きさと各遺跡の考古資料を考え合わせると、これらの“地方体”はかなり発達したものであったと予測される。先チャビン期の大規模な公共建造物やその立地、規模や副葬品が他と著しく異なる墓の存在から、特殊な地位、役割をもった人物の存在並びにおそらくそういう人物を中心としたある程度組織化された社会、階層化した社会の存在が想定されるのである。

そして、その統治システムや交易網は基本的にはチャビン期になっても存続していた。というよりは“チャビン”は、この先行形態にいわばのった形で、広大な地域から特に祭祀儀礼用の品、または原材料を入手し、あるいは逆に各地に再分配していたと考えられる。すなわち“チャビン”は、もともと先チャビン期の地方体の相互関係を基盤として成立したのではないと思われるのである。このことはチャビン特徴の諸要素やチャビン特徴の飛び石的な分布などによって裏づけられるであろう。ではなぜ、旧態（独立した地方体、交易網）が存続されながら、一方でその態勢に逆行するかのような“チャビン”が出現し、やがて広い範囲に影響を及ぼすようになっていったのだろうか。

中央アンデス形成期文化の研究（Ⅱ）

その背景の少なくとも一つとして考えられるのは、世界的といわれる大規模な気候悪化である。これはおよそ 900 B. C. から 500 B. C. ごろまで続いたとされる。すなわち、中央アンデスの形成期下層末から中層（チャビン期）中ごろまでにあたる⁷⁾。形成期下層の各地方体は主に交易を通じてすでに相互関係をもっていたため、おそらくほとんど同時期に様々な危機に直面したと思われる。特に生業・経済は大きく影響を受けたと考えられ、旧来の体制、秩序に様々な矛盾が見出だされるようになる⁸⁾。しかし、いわゆる支配階級の人々は、自らの地位や特権を守るために旧来の秩序を何とか維持しようとする。そこで、このような社会の矛盾や不平等を覆い隠すために何等かの新しいイデオロギーが必要となってくる。彼らはそれを新しい宗教的概念を創作することによって解決しようとしたのではないか。すなわち、各地の様々な要素を取り入れ、新しいが伝統的なパターンを踏襲する概念を付し、それを超自然的なものとすることによっていわば無批判に社会に受け入れさせ、旧来の社会秩序を再びつくりあげようとしたのではないだろうか⁹⁾。“チャビン”とは、このようなことを背景として生じた一つの変化過程ととらえうる。すなわち、何等かの大きな原因によって旧来の形が変化を余儀無くされたが、一方、何とかそれを保持しようとした結果生じた、かなり不安定な状態といえる。その過程を通じて内部でも様々な変化があったことは想像に難くない。そして、その状態がもはや維持できなくなった、または維持する必要がなくなったときが、この変化過程の終極のときである。しかしながら、各地方体の“チャビン”の受入れ方は、各々がその当時おかれていた状況によって様々であった。たとえば、情勢が逼迫し新しいイデオロギーの導入が急を要していた地方体はこれを積極的に取り入れ、そうでないところでは独自の旧態をしばらく保持できた、というようなことが考えられる。すなわち、“チャビン”の受入れられ方は、キーンティングがいうように、非常に選択的であった（Keatinge '81, P. 178）。“チャビン”はたしかに各地方体に大きな影響を与えたとはいえるが、それはただ“チャビン”が各地方体の危機への対処に都合のよい新しいイデオロギー、すなわち宗教を包含していたがためであり、それゆえ、影響力はあっても、たとえば国家のように他を強制したり統合したりするような力はなかったと思われる。変化過程は、その当時の様々な事象すべてを包含しているので、それ自体、文化、社会、生業・経済など多様な側面をもっていたことになる。この場合、そのうちの文化の側面が顕著に見られるといわれている所がチャビン・デ・ワンタルであり、その文化の側面を扱う場合にチャビン文化という表現になるのである。

さて、このチャビンという変化過程が生じた後、次第にその影響力を広げていく過程において、各地方体に与えた影響の大きさ、程度、という点に関してかなり重要だったと思われるのが、両者間の距離とルートである。まず問題になるのは、なぜチャビン・デ・ワンタルの地が重要なセンターとして選ばれたのか、ということであるが、これまでのところその決定的な根拠となるようなことは特定されていない。チャビン・デ・ワンタルが本当に“チャビン”の中心だったという確証はないが、少なくともその中心的なセンターの一つであったろうことは、遺跡の内容からも認められるであろう。“チャビン”はかなり早いうちに G 1 程度と想定された勢力範囲（チャビン文化圏と

仮称)を確立したが、その後の各地への影響の仕方は勢力範囲確立のときの同心円的なパターンとは異なるものだった。後半にはいって“チャビン”は次第に各地に受け入れられるようになるが、たとえば Staff God の分布のように、遠く離れた所に存在するが中間の地域にはみられないようなパターンが出てくる。これは、“チャビン”が中心から同心円的に周囲を席捲していったのではなく、当該地域との間に直接、直線的な結びつきをもったためではないかと思われる。ここでそのルートが問題になってくるが、その一例としてパコパンパをとりあげてみよう。

先述したように、チャビン・デ・ワントルとパコパンパとは支流を通じてマラニョン川で結ばれており、直接的な接触は充分考えられる。中央アンデスは多くの河川とその支流が特に高地部でよく発達し、また高地から50本ぐらいの河川が海岸線にほぼ直角に流れ込んでおり、これらの河川を利用した交通ルートは古くからかなり発達していたといわれている。これ以外に、高地産のラクダ科動物ヤマを利用したキャラバンや海岸伝いに舟を利用する方法などが可能性としてあげられる。いくつかの遺跡で獣骨資料が出土しており、それによると特に高地遺跡で、先チャビン期にラクダ科の骨が次第に増加し、チャビン期にはシカとラクダ科との地位が逆転するという。すなわち、ラクダ科動物の重要性が次第に増大してくるのである。多くの研究者はこれをもって、チャビン期にはラクダ科動物はすでに家畜化されていた、と考えている。ルートは一つとはかぎらないし、これを特定することは容易ではないが、いずれにしてもチャビン文化圏との直接的な接触はどこの地域でも可能であったことは、概ねいえるであろう。もっとも、このようなルートは、先述したように、すでに先チャビン期から相当発達していたものと思われ、“チャビン”はいわばそのネットワークを利用しないしは踏襲したものといえる。

いわゆるチャビン文化においては、おそらく特に宗教儀礼に関連して、熱帯産の動植物やスポンジュラスがきわめて重要な役割を果たしており、これに関連してチャビン期に交易網がさらに発達していったことは想像に難くない。が、どちらも基本的には中央アンデス北半で入手されうるものであり、“チャビン”の南進が遅い時期になるのはこのこととも関係があると思われる。このチャビンの南進の一つの契機になったと思われるのが、黒曜石の重要性の増大とその給源の発見ないしは支配である。パコパンパ、ワリコトなどいくつかの遺跡では、チャビン並行期、特にその後半相当期に黒曜石の出土量が増加することが知られている。このうち、パコパンパ出土の黒曜石を蛍光X線分析したところ、給源は中部高地のキスピシサであることがわかった。この他に、エクアドルの中央少し北のムユミカも黒曜石の産地として知られ、パコパンパからはこちらの方が直線距離で250kmほど近い。にもかかわらず、パコパンパではムユミカのものではなくキスピシサの黒曜石を使っていたのである。この分析を行なったバーガーは、地勢学的な条件と考え合わせて、一種の境界のような自然の障害がエクアドルとペルーの間に古くからあり、これを越えて一方から他方へと文化が広がることはなかった、としている。が、理由はそれだけではなく、“チャビン”を受け入れるに伴ってその物流システムに参加する必要があったのではないか。直接的な証拠はないが、パコパンパは中央アンデスの極北部に位置しておりエクアドル地域と中央アンデス文化領域との中

継点としての機能を果たしていた可能性は、たとえばスポンジュラスの入手経路などを考えると、依然として、否定はできない。パコパンパが先チャビン期に極北部一帯で最大規模の公共建造物を有していたこと、またチャビン期後半のチャビン特徴“Staff God”をもっていることから、この遺跡自体の先チャビン期からチャビン期を通じての重要性が窺われる。同時に、パコパンパが先チャビン期から重要な他地産物の集積地であった可能性も考えておかなければならないであろう。そしてそれがゆえに、おそらく新しい祭祀儀礼用の品として重要になった黒曜石が、“チャビン”の息がかかった中央アンデスの給源からわざわざパコパンパへと運ばれてきたのではないだろうか。いずれにしても、“チャビン”がキスピシサの黒曜石を積極的に利用することによって中央アンデスの交易網はさらに発達し、“チャビン”もこの一帯を足場にして南にも確実に影響を与えるようになっていったものと思われる。

チャビン期の、いわゆるチャビン文化圏も含めた各地の地方体間の関係は、上にみてきたように、互いに独立を保ちながらも、一方、交易を通じた“チャビン”という変化過程に巻き込まれることによって、互いに密接に関わり合っていたととらえることができるであろう。そのため、これらの地方体はおそらく各々独自の社会や文化などの特徴をもちながら、ほとんど同時に発展し、また衰退もしていったものと考えられる。チャビンが“state”ではないことは、当時の中央アンデスが単一の統一体でなかったことから明らかである。しかしまた、“tribe”でもなかったことは、これらの地方体間にはチャビン文化圏を頂点とした階層が認められることや各地方体の中に支配・被支配者層の別があったことが想定される、少なくとも特殊な地位にあった人間、一族がおり、特に“チャビン”との関係においてある種の特権をもっていた（シヤコト、カルワ例）ことから首肯できよう。おそらくこれらの地方体は、両者の中間の“chiefdom”に相当するものと思われる¹⁰⁾。それでは、これら chiefdoms が互いに独立を保ちながら密接に関わり合う、という関係はどのような性質、特徴をもっているのだろうか。またそれらは中央アンデスの形成期ではどのような形でとらえられるのだろうか。

Ⅳ. “チャビン”の性質について——結びにかえて——

このような chiefdom レベルの地方体を考えるにあたって参考になるのは、レンフルーの“Peer Polity Interaction”（同等の政体間の相互作用）というモデルとそれによって政体の様々な社会的文化的現象を説明しようとする試みである。

このモデルは、1980年代の初めに提出されたもので、レンフルーとチェリーが編者の“同等の政体間の相互作用と社会政治的变化”（1986）の中で詳しく論じられている。その序章でレンフルーは同等の政体間の相互作用に関して検証可能なこと、およびそのような相互作用の結果生じると考えられる変容などについて述べている。ここでは、中央アンデス形成期の地方体間関係に、彼のいう相互作用やその結果生じる変容がみられるかどうか、みられるならそれがどのように現れてくるかを、すなわち、このモデルの中央アンデス形成期への適用の可能性を予察する。そして、この

時期の一大変化過程“チャビン”がどのような性質をもっていたと考えられるかということ、政体（地方体）間の相互作用の側面から考えてみたい。

まず、レンフルーが同等の政体間の相互作用に関して検証可能だとしていることは、大きく二つにまとめられる。第一のものは、政体が一つ認められたら、似たような大きさ、似たような組織をもった政体はその近隣に見つけれ、また、一つの政体に重大な変化が認められたら、同地域内の他の政体も同様の変容をほぼ同時に被るだろう、というものである。これは、先チャビン期末の中央アンデスに広く見られる。このころ何か大きな変化が広範囲に起き、形成期下層の諸地方体は旧態の変化を余儀無くされる。すなわち、チャビンの出現である。

第二は、諸特徴はどこか一か所で発明されたのではなく、同地域内の異なる政体でほぼ同時に起きた、というものである。これは、中央アンデス形成期では、たとえば、精巧な金細工や複雑な組み合わせ文、猫科動物文をもつ骨製品の起源は不明であるがほぼ同時期に出現する、という現象に関わってくる。

つまり、これらの政体は別個のものであるが互いに近接し、それがために互いに影響し合い、各政体の中で起きた変化に互いに敏感に反応し、その結果互いに同等の政体のクラスターができる、というものである。すなわち、レンフルーは、同じ地域内に互いに近接して存在する自治的な社会政治的ユニットは、長期間にわたる相互作用の結果であり、構造的に相同性をもつようになったのだ、と考えているのである。では、その相互作用とはどのようなものなのだろうか。

レンフルーによると、相互作用の結果生じる変容過程は大きく次の三つのカテゴリーに分けられるという。

1) 競争（戦争を含む）および対抗

“戦争”は、資源を使い果たしたとき集中して起き、結果として階層化を生じる。しかし、戦争の直接的な考古学的証拠を手に入れることは難しい。中央アンデスの形成期で唯一これと結びつけられそうなものは、セロ・セチンの例である。チャビンに関しては、これは適用し難いと思われる。もしもチャビンが他の地方体を軍事的に制圧していったのだとしたら、少なくとも戦争に関する遺物類、武器やあるいはセロ・セチンのような記念碑的彫刻類などが、もっと数多く出土するのではないだろうか。

“競争”は、同等または類似の地位のものの中で、あるいは下位のものが上位のものにとって代わろうとするとき、すなわち従来の社会秩序やイデオロギーが失われたときに起こりうる。けれども、チャビンの出現は新しいイデオロギーの出現であり新しい秩序の出現である、と解釈されうる。したがって、チャビンの成立後は前者のケースにより近いと思われる。これは次の対抗に類似した状況と考えられる。

“対抗”は、地方体間の中でより上の地位を獲得するために、富や力を誇示し合うなどの形で生じる。その例の一つとして、記念碑的建造物、大規模建造物（神殿など）の造営があげられよう。しかし、チャビン文化圏（G1）の場合は、その成立の背景のために出現当初からある種の優勢を

すでにもっていたことが予測される。したがって、これもあまり適切な説明とはいえない。

2) シンボルの同調化、および刷新、工夫の伝達

レンフルーは、“シンボルの同調化”はかなり発達した政体間で起こると考えているようであるが、シンボルや威信といったものはいつの時代でも、特に信仰・宗教においては、重要であり、いつの時代でも求められていたと思われる。そして、中央アンデス形成期の場合、いわゆる“チャビン”特徴はこのようなシンボルのセットとしてとらえうる。チャビン期前半にはまだ“チャビン”を受け入れずに独自性を保っていた地域、たとえばパコパンパを中心とする極北部高地やカルワ、オクカヘなどの南部海岸などは、おそらく独自のシンボル（のセット）をもっていたであろう。しかし、ひとたび“チャビン”の影響を受け入れると、すなわちチャビンのもっている新しいイデオロギーを採用してそれによって支配者層が自らの地位や特権を保持し、旧来の社会秩序を維持しようとする、彼らは“チャビン”のシンボルを有し、チャビンの威信を有することを望んだ、ないしはその必要が出てきたのである。チャビン特徴をそのままの形で受け入れるか、変容させるかは、各地方体毎の事情、あるいはチャビン文化圏との関係によっていたものであろう。

シンボルや威信だけでなく、シンボルの性質を何らもたない“刷新や工夫”も政体間で伝達されるという。レンフルーによると、伝達は伝播とは異なるものである。伝達とはほぼ同等の地位のものの中で起こるものであり、また刷新・工夫も新しい特徴をまったくオリジナルに発明することではなく、それが他の社会に広く受け入れられることである、としている。“受け入れられる”ということが重要であるとすると、“チャビン”はまさしくこのケースにあてはまる。

これら二つがおそらく“チャビン”の性質を有効に説明しうるものと考えられる。チャビンは元来シンボルの性格をもっており、それがために受け入れられた地にその痕跡を残すと共に、受け入れられ方の多様性をも明確に今日まで伝えていると考えられるからである。

3) 物流の増大

レンフルーも述べているように、これは同等の政体間の相互作用に限られる特殊なことではない。しかしながら、中央アンデス形成期の場合、この点は集中的に議論されるべき重要なポイントの一つである。というのは、中央アンデスでは生態学的ゾーンが独特の分布パターンをみせており、各ゾーンの産物がかかなり古く（先土器期末）から様々な地域に見出だされ、ときに産地から非常に遠いところにも発見されている。このような環境帯、資源、ならびに産物（考古学遺物）の分布パターンを見ると、この独特の環境・資源を開発・利用する独自のシステムが古くから存在したと考えられるのである。そして、それに伴って広範な地域を包含する交易網と呼びうるようなものが、おそらく先土器期末にはすでにできあがっていたことが予測されるのである。当時の資源利用法そのものはよくわかっていないが、おそらくその方法はずっと踏襲されていき、チャビン期の、特に宗教的な祭祀儀礼に必要な品々の調達、および分配を支えたものと思われる。先述したチャビンのシンボルの性格によって、それに関係する物資を中心として物流はさらに活発になったことが予想されるが、その質量の検討は、今後の調査・研究に委ねなければならない。

以上、中央アンデス形成期の鍵層“チャビン”について、主な特徴の質とその分布パターンの検討に基いて、そのあり方、出現と拡大の背景、ならびに性質について考えてきた。初めにもふれたように、中央アンデス地域は考古学資料の質量共に充分ではなく、このような検討、論考に必要な直接的証拠も著しく欠けている。しかしながら、中央アンデス一帯の今日の状況を鑑みると、資料の集積、公表にはまだまだ多くの時間がかかるようであり、一方、今後の作業仮説として見通しをまとめておく必要もあると思われることから、あえてここに記すことにしたものである。

末筆ながら、様々な指導、助言をいただいた考古学研究室の指導教官、上野佳也教授（現大正大学教授）、藤本強教授、イリノイ大学人類学部の指導教官、故ドナルド・レイスラップ教授、およびトーマス・ディルヘイ教授、ならびにアンデス調査団の資料の使用を快諾くださった文化人類学教室の故寺田和夫教授および大貫良夫教授に深く謝意を表する次第である。

出典

- Fig. 2-1~3 Tello, J. C. 1960 Fig. 2-4,5 Rowe, J. H. 1962 Fig. 3-1 Burger, R. L. 1983 Fig. 3-2, 3,8 Roe, P. G. 1974 Fig. 3-4~7,9 Tello, J. C. 1960 Fig. 4-1,2,4,7~9 Burger, R. L. 1984 Fig. 4-3, 5, 6 Tello, J. C. 1960 Fig. 4-10 Rowe, J. H. 1962 Fig. 4-11, 13~15 Lumbreras L. G. & H. Amat 1969 Fig. 4-12 Lumbreras L. G. 1971 Fig. 5-1 Tello, J. C. 1943 Fig. 5-2, 4,5,7~9, 12~14 Tello, J. C. 1960 Fig. 5-3, 11 Lumbreras, L. G. & H. Amat 1969 Fig. 5-6,10,15~19 Burger, R. L. 1984 Fig. 6-1~4, 6~8, 10 Izumi, S. & T. Sono 1963 Fig. 6-5 Izumi, S., J. Cuculiza & C. Kano 1972 Fig. 6-9 Izumi, S. & K. Terada 1972 Fig. 7-1 Tello, J. C. 1960 Fig. 7-2 Tello, J. C. 1943 Fig. 7-3 Tello, J. C. 1985 Fig. 7-4~9 Burger, R. L. 1985 Fig. 8-1,3, 4 Roe, P. G. 1974 Fig. 8-2 Rosas, H. & R. Shady 1974 Fig. 8-5~10 Rosas, H. & R. Shady 1970 Fig. 9-1~9 Carrion Cachot, R. 1948 Fig. 9-10 Terade, K. & Y. Onuki 1979 Fig. 10-1, 3, 5 Rowe, J. H. 1962 Fig. 10-2, 4 Carrion Cachot, R. 1948 Fig. 11-1~4,7~12 Carrion Cachot, R. 1948 Fig. 11-5,6 Roe, P. G. 1974 Fig. 11-13~15 Pozorski, T. 1975 Fig. 12-1~3 Tello, J. C. 1943 Fig. 12-4 Carrion Cachot, R. 1948 Fig. 13-1 Roe, P. G. 1974 Fig. 13-2~8 Tello, J. C. 1943 Fig. 13-9~12 Roe, P. G. 1974 Fig. 13-13~18 Tello, J. C. 1956 Fig. 14-1~3 Tello, J. C. 1956 Fig. 14-4~8 Matos Mendieta, R. 1973 Fig. 15-1~8, 10~12, 14~18 Willey, G. R. & J. M. Corbett 1959 Fig. 15-9, 13, 19 Carrion Cachot, R. 1948 Fig. 15-20 Burger, R. L. 1983 Fig. 16-1~6 Ravines, R. & W. Isbell 1975 Fig. 17-1~18 Ravines, R. et. al. 1982 Fig. 18-1~4 Roe, P. G. 1974 Fig. 19-1, 2 Rowe, J. H. 1962 Fig. 19-3 Burger, R. L. 1983

註

- 1) Pozorski '76, Fig. 52-63
- 2) 報告書によると、この遺跡の周辺には他にもかなり形成期の遺跡があるという。(Terada & Onuki '79, Fig. 3)
- 3) バーガーによると、500B.C. ごろとされている。(Burger '83)
- 4) Izumi & Terada '63 "ANDES II Excavations at Kotosh, Peru" Pl. 133-10
- 5) これら様々な環境帯の産物の入手法は大きな問題であるが、筆者は直接入手法と交易と呼びうる間接入手法との並存を考えている。詳細は別稿に譲る。
- 6) 黒炭の面を平らに磨いたもの。

中央アンデス形成期文化の研究 (II)

- 7) また特に中央アンデスの場合、エル・ニーニョ現象による気候悪化の可能性も考えておかなければならない。
- 8) たとえば、極端な貧富の差や従来の祭祀儀礼の有効性に対する疑問などは旧態に対する不満、不信を増大していったと思われる。
- 9) イデオロギーに関する議論は、Leone '84, Shanks & Tilley '82 による。
- 10) E. Service '62, W. T. Sanders & J. J. Marino 大貫訳 '72

参 考 文 献 (前稿との重複分を除く)

Burger, R. L.

- 1983 Unity and heterogeneity within the Chavin horizon. *In* Peruvian Prehistory. R. W. Keatinge, Ed. pp. 99-144. Cambridge University Press.
- 1984 Archaeological Areas and Prehistoric Frontiers: the case of Formative Peru and Ecuador. *Proceedings of 44 International Congress of Americanists. BAR International Series 193: 33-64.*
- 1985 Prehistoric Stylistic Change and Cultural Development at Huaricoto, Peru. *National Geographic Research 1:505-534.*

Burger, R. L. & L. S. Burger

- 1980 Ritual and Religion at Huaricoto. *Archaeology 33(6):26-32.*
- 1985 The Early Ceremonial Center of Huaricoto. *In* Early Ceremonial Architecture in the Andes. C. Drennan Ed. *Dumbarton Oaks. pp. 111-138. Washington, D. C.*

Cohen, M.

- 1981 The Ecological Basis for New World State Formation: General and Local Model Building. *In* The Transition to Statehood in the New World. Jones and Kautz, Eds. pp. 105-122. Cambridge University Press.

Crumley, C. L.

- 1987 A Dialectical Critique of Hierarchy. *In* Power Relation and State Formation. Patterson and Gailey, Eds. pp. 155-169.

Fung Pineda, R.

- 1985 Excavaciones en Pacopampa, Chota. *In* Historia de Cajamarca 1. *Arqueologia pp. 153-163. Instituto Nacional de Cultura-Cajamarca.*

Griender, T. and A. Bueno Mendoza

- 1981 La Galgada: Peru Before Pottery. *Archaeology 34(2):44-51.*
- 1985 Ceremonial Architecture at La Galgada. *In* Early Ceremonial Architecture in the Andes. C. Drennan, Ed. pp. 93-109. Washington, D. C.
- 1988 La Galgada, Peru: A Preceramic Culture in Transition. University of Texas Press, Austin.

Haas, J.

- 1981 Class Conflict and the State in the New World. *In* The Transition to Statehood in the New World. Jones and Kautz, Eds. pp. 81-102. Cambridge University Press.

Haas, J., S. Pozorski and T. Pozorski

- 1987 The Origins and Development of the Andean State. Cambridge University Press.

Izumi, S., J. Cuculiza & C. Kano

- 1972 Excavations at Shillacoto, Huanuco, Peru. The University Museum, The University of

Tokyo.

Kauffmann-Doig, F.

1983 Manual de Arqueologia Peruana. Ediciones Peise, Lima.

Kaulicke, P.

1975 Pandanche: Un Caso del Formativo en los Andes de Cajamarca. Seminario de Historia Rural Andina, Lima.

1981 Keramik derperüen Initialperiode aus Pandanche, Departamento Cajamarca, Peru. Beiträge der Allgemeine und Vergleichende Archaeologie 3:363-389. München.

Larco Hoyle, R.

1938 Los Mochicas. Casa Editorial, Lima.

Leone, M.

1984 Interpreting ideology in historical archaeology: The William Paca Garden in Annapolis, Maryland. In Ideology, power and prehistory. D. Miller and C. Tilley, Eds. pp. 25-36. Cambridge University Press.

Masuda, S., I. Shimada and C. Morris

1985 Andean Ecology and Civilization. University of Tokyo Press.

Matos Mendieta, R.

1973 Ataura: Un Centro Chavin en el Valle de Mantaro. Revista del Museo Nacional 38:93-108.

Morales, D.

1985 La Ceramica Pre-Chavin de Pacopampa y la Fase Inicial de Pandanche. In Historia de Cajamarca 1. Arqueologia pp. 165-167. Instituto Nacional de Cultura-Cajamarca.

Onuki, Y.

1967 中央アンデスにおける形成期及び古典期, 後古典期の生態学的背景。ラテンアメリカ研究 8: 71-100.

Onuki, Y. and T. Fujii

1974 ラパンパの発掘, 人文科学紀要 59: 45-104. 東京大学出版会

Pozorski, T.

1975 El Complejo Caballo Muerto: Los Frisos de Barro de la Huaca de los Reyes. Revista del Museo Nacional 41:211-251.

1976 Caballo Muerto: A Complex of Early Cermic Sites in the Moche Valley, Peru. Ph. D. Dissertation.

Pozorski, S. & T. Pozorski

1987 Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru. University of Iowa Press.

Ravines, R.

1982 Arqueologia del Valle Medio del Jequetepeque. Lima.

1984 Sobre la formacion de Chavin: Imagenes y simbolos. Boletin de Lima 35:27-45

Ravines, R. & W. Isbell

1975 Garagay: sitio ceremonial temprano en el valle de Lima. Revista del Museo Nacional 41:253-275.

Ravines, R., H. Engelstad, V. Polomino and D. Sandweiss

1982 Materiales Arqueologicas de Garagay. Revista del Museo Nacional 46:135-233.

Renfrew, C. and F. Cherry

1986 Peer Polity Interaction and Socio-political Change. Cambridge University Press.

中央アンデス形成期文化の研究(Ⅱ)

Rosas, H. and R. Shady

- 1974 Investigaciones Arqueologicas en la Cuenca del Chotano. Actas del XLI International Congress of Americanists 3:564-578.

Sanders, W. T. and J. J. Marino, 大貫良夫 訳

- 1972 現代文化人類学 6 新大陸の先史学. 鹿島出版会

Service, E.

- 1962 Primitive Social Organization. Second Edition. Random House, New York.

Shanks, M. and C. Tilley

- 1982 Ideology, Symbolic Power and Ritual Communication: A Reinterpretation of Neolithic Mortuary Practices. *In* Symbolic and Structural Archaeology. I. Hodder Ed. Cambridge University Press.

Spencer, C.

- 1988 Rethinking the Chiefdom. *In* Chiefdom in the Americas. Drennan and Uribe, Eds. University of Americas Press. pp.369-389. Washington, D. C.

Tello, J. C.

- 1956 Arqueologia del Valle de Casma. Editorial San Marcos, Lima.

- 1985 Los Sepulcros de Yanacancha. *In* Historia de Cajamarca 1. Arqueologia pp.177-178. Instituto Nacional de Cultura-Cajamarca.

Terada, K.

- 1979 Excavations at La Pampa in the North Highlands of Peru. University of Tokyo Press.

- 1982 Excavations at Huacaloma in Cajamarca Valley, Peru, 1979. University of Tokyo Press.

- 1985 Excavations at Huacaloma in Cajamarca Valley, Peru, 1982. University of Tokyo Press.

Trigger, B.

- 1978 The Archaeology of Government. World Archaeology 6-1:95-106.

Willey, G. R. and I. Corbett

- 1959 Early Ancon and Early Supe Culture. Columbia University Press.

Wright, H. T.

- 1977 Toward an explanation of the origin of the state. *In* Explanation of Prehistoric Change. J. Hill, Ed. pp.215-230. University of New Mexico Press.

A Study of the Formative Culture of the Central Andes, Peru (II)

—On the background of the Rise and Expansion of the Chavin Culture—

Kayoko TOSHIHARA

I. Introduction

The Chavin culture is famous for the diversity of its manifestations in various regions of the Central Andes. Chavin pottery of the early phase, as shown in Part 1 of this paper, related to the ceramic culture of the pre-Chavin culture on the eastern slopes of the Andes. Soon after that or almost at the same time, the ceramic culture of Chavin de Huantar was influenced by that of the coastal area. That is, Chavin culture can be said to have been influenced by various pre-Chavin cultures of the Central Andes from the time of its rise, or to have risen based on the interrelationships among the pre-Chavin cultures. Therefore, for discussion of the so-called "Chavin problem", it is necessary to take into consideration pre-Chavin cultures. Before that, however, the Chavin culture itself should be clarified concerning the diversity of its manifestation, how it expanded, what promoted its expansion, and so on.

As for the Chavin culture or "what Chavin is", there are various interpretations, such as "religious empire" (Carrion), "pilgrimage center" (Larco-Hoyle), "art style" (Willey), "patron god, a symbol of a community" (Sanders), "revitalization after a crisis" (Burger), and so on. Some of the reasons for this uncertainty of the nature and/or the background of "Chavin" might be as follows:

- a. The religious nature of "Chavin" was too strong or it is too strongly emphasized.
- b. Although "Chavin" is said to have spread widely over the Central Andean area, its manifestations are extremely variable.
- c. The definition of "Chavin" is indefinite.
- d. The strength of "Chavin" influence on each region is not well discussed.

Therefore, this paper concentrates on the distribution of the Chavin culture and its background. Pre-Chavin cultures and their interrelationship will be discussed in another paper. As previously mentioned, the quality and quantity of the data concerning the Central Andean Culture Area are insufficient because of the small number and size of excavations, bias of investigation and excavation, and the scarcity of reports. Therefore, tentative definition of "Chavin traits" is made below in outline form to judge the so-called

Chavin sites and to discuss the distribution of the Chavin culture according to the artifacts found at Chavin de Huantar. This definition is mainly based on the motifs of stone/adobe sculpture, specific elements of design, decoration technique, and vessel forms of the ceramics.

A. Stone/Adobe Sculpture

1. Complex designs combining various images and elements such as eccentric eyes, fangs, sharp nails, and stylized curvilinear motifs on flat stone surface. (Fig. 2)
2. Quite realistic round carving representing a head of a feline or a human being. (Fig. 3-4~7)
3. Human beings which are represented very realistically. Rare. (Fig. 3-8, 9)

All of these can be regarded as diagnostic Chavin traits, although Type 3 is a little dubious.

B. Ceramics

1. Group D: This group typically has curvilinear stylized motifs mainly depicting a feline or its attributes on bowls and single spout/stirrup-spout jars with highly polished monochrome surface. Motifs including those of combinations of animals clearly show their relation to those of stone sculpture 1. Both of them are of the early phase of the Chavin period. (Fig. 4-11~15, 5-1~11)
2. Group A: This group derived from Group D; especially, impressions and stamped motifs show the relation with Group D. Although the design itself is not the same as those on the stone sculpture, some of the sculptures include these motifs and both of them are of the late phase of the Chavin period. (Fig. 5-15~19)

According to these categories, the alleged Chavin sites are discussed - if their traits are really the "Chavin traits", and the degree to which they are similar or homogeneous to the Chavin traits by comparing them with the diagnostic Chavin traits. Then, these sites are classified into four categories based on these traits and the distribution pattern of the site categories and their meaning will be discussed. Following this, the background of the rise and expansion of "Chavin" and that of the diversity in the manifestation of "Chavin" will be considered by using a model of socio-cultural organization.

The sites discussed in this paper are as follows:

Highlands: Huanuco basin, Yauya, Huaricoto, Hualgayoc, La Pampa, Kuntur Wasi, Pacopampa, Ataura

Coast: Chongoyape (Lambayeque), Chicama Valley, Caballo Muerto (Moche), Cerro Blanco (Nepeña), Punkri (Nepeña), Cerro Sechin (Casma), Pampa de las Llamas-Moxeque (Casma), Pallka (Casma), Supe and Ancon, Garagay (Rimac), Karwa, Callango, Ocucaje

(Ica)

The total is twenty-one sites (and regions).

II. So-called Chavin Sites and Cultural Sphere

In this chapter, the quality of the relation between the alleged Chavin sites and the Chavin culture is discussed. As the manifestation of the Chavin traits are diverse, four categories of the site are made as follows, according to the degree of similarity and/or homogeneity of the Chavin traits of each site with the defined Chavin traits in the previous chapter.

- A: Those which typically have the diagnostic Chavin traits on several kinds of artifacts such as stone sculpture, bone sculpture, ceramics and stone objects. These constitute Chavin site and are included in the Chavin culture.
- B: Those which have the diagnostic Chavin trait(s) but insufficient in number/amount, such as having a stone sculpture only. These are tentative Chavin sites.
- C: Those which have the diagnostic Chavin elements but greatly modified or combined with elements which are not Chavin-hence, cannot be approved to be the Chavin sites. These were influenced by the Chavin culture or had a certain relationship with the Chavin culture.
- D: Those which do not have the diagnostic Chavin traits have been defined. Elements show no or little influence of "Chavin". These are not Chavin sites, or are very dubious. Or, those which do not have enough evidence, especially, where the ceramics are unknown.

The twenty-one sites (and regions) are classified as follows:

Site/Region	Stone Sculpture	Ceramics	Other Artifacts	Category
Huanuco Basin	—	D, A	—, Staff God (A)	A
Yauya	1	—	—	B
Huaricoto	—	D, A	Bone Object (D)	A
Hualgayoc	X	—	Stone Vessel (1)	D
La Pampa	◇	(D), A	Stone Tablet (A)	C
Kuntur Wasi	1, 2, ◇, X	D, A	—	A
Pacopampa	◇	A	(Staff God), Mortar (A)	C
Ataura	—	(D), A, pre-Chavin	—	C
Chongoyape	—	—	Gold Objects(A, ◇, SG)	C

中央アンデス形成期文化の研究 (II)

Chicama Valley	—	D, A	Stone Objects (A?)	C
Caballo Muerto	1	A, pre-Chavin	—	B
Cerro Blanco	1	D	—	A
Punkuri	◇, X	—	—	C
Cerro Sechin	3, ◇, X	(D, A, pre-Chavin)	—	C
P. de las Ll-Mo.	(◇), X	—	—	D
Pallka	—	D, A	Bone Object (1)	A
Ancon-Supe	—	(D), A, pre-Chavin	Bone Object (A)	C
Garagay	◇, X	(D, A)	Mud Figurines (A?)	C
Karwa	—	(◇)	Textile (1)	C
Callango	—	—	Textile (1)	C
Ocucaje	—	◇, (A)	Textile (1)	C

(—: none, X: not Chavin, ◇: some Chavin elements, No.: type of the stone sculpture with the same Chavin traits, Alphabet: type of the ceramics with the same Chavin traits, SG: Staff God)

Among the above-mentioned twenty-one sites and regions, five were classified in Category A, two were in each of B and D, and the rest, twelve, were in C. The distribution map of these sites is shown in Fig. 1, in which Categories A and B show certain patterns. Four of these seven sites are located at almost the same distance from Chavin de Huantar, making a half-circle (33, 70, 31, 48). The other three sites are located in different regions apart from each other, making site clusters (34, 7, 11). Besides these, there are several site clusters in which sites of Category C are located. These site clusters can be put together to make several groups according to their distribution and to the Chavin traits of the main sites in each cluster.

Those which make a half-circle surrounding Chavin de Huantar make one group (G1). This might indicate the sphere of Chavin, as the Chavin traits of main sites include typical curvilinear motifs and/or motifs of the main diety of "Chavin". These Chavin traits indicate that these sites were a part of "Chavin" from the early phase of the Chavin period.

The extreme North Regions make one group through the coast to the highlands (G2). The main sites are Pacopampa and Chongoyape, both of which have a modified or localized Staff God, motifs of coiling serpents, and rather realistic feline motifs. Most of them, as well as the ceramics, are the Chavin traits of its later phase.

To the south of G2, the regions from Kuntur Wasi to Chicama Valley are put together

to make G3. The Chavin traits are characterized by a fanged mouth depicted vertically to the face, and motifs consisting of the Chavin elements extracted from the Chavin traits. These Chavin traits or elements are of the later phase of the Chavin period. It is a pending question whether the Caballo Muerto site is included in this group or makes another group.

Going up the Santa Valley, the La Pampa site makes one group (G4), as it shows no close relation with any site in the other regions nearby. The Chavin traits are mainly those of the later phase of the Chavin period.

On the southern part of the North Coast, site clusters in the Nepeña Valley and Casma Valley are put together to make one group (G5). The Chavin traits of the main sites, Cerro Blanco and Pallka, include typical ones of the early phase of the Chavin period. This suggests that these sites related to "Chavin" from an early time. Among the sites of G5, however, some show different features from the other sites, and their relation to "Chavin" is questionable. Although G5 is located closest to G1, the Chavin sphere, their relationship is not yet well known.

To the south, a site cluster in the Supe Valley appears isolated in the north part of the Central Coast, which is alleged to make one complex with Ancon. In this group (G6) the Chavin traits are of the later phase. They are typically seen in the expression of the mouth and the curvilinear motifs with punctuation. Besides these, however, cultural features are not very close to those of "Chavin".

In the Central Highlands one group is seen around Ataura (G7). The published data are, however, scarce and little is known about this area. The Chavin traits of its later phase are more identifiable than the earlier one.

The sites on the South Coast are put into one group (G8). The Chavin traits, including the Staff God, are mainly seen on the textiles. Motifs on the ceramics have some similarity to those of the later phase of the Chavin period, but are greatly modified, in addition to the technique which is characterized by the multi-colored resin depicted on the matt surface. These are not seen on the so-called Chavin pottery.

Therefore, there seems to have been at least eight cultural spheres in the Central Andes during the Chavin period. Among these G1 and G5 probably existed as Chavin (related) sites from the early phase of the Chavin period. The other sites show a relation to "Chavin" in the later phase, all of which belong to Category C. That is, "Chavin" began to expand in its later phase, its influence, however, was not so thorough at these sites (Category C sites), which did not come to be included in "Chavin" as true Chavin sites. Thus, each of these eight groups might be regarded as a sort of "autonomous polity", each having its own

tradition and being independent from each other. Then, why and how did "Chavin" rise and expand to make this situation, and what is "Chavin"?

III. Regional Interaction and the Background of the Rise and Expansion of "Chavin"

Although it will be discussed in another paper, there might already have been almost the same "cultural spheres" as mentioned above in the Early Formative period. "Chavin", so to speak, suddenly appeared among them. Once established, however, Chavin seems to have expanded by connecting directly with each region rather than by sweeping concentrically over the regions. It is seen, for example, in one phenomenon that the Staff God was expressed on various artifacts in G2 and G8, but none was found in the intervening regions. As for the connection of Chavin de Huantar with each region, four sites, Huanuco basin, Pacopampa, Cerro Sechin and Karwa, show some interesting features.

Among the elements of the Chavin traits various products of the tropical forests, such as feline, cayman, manioc, etc. are seen. Although these products may have been imported into the Central Andes directly from the tropical forest, they could have been brought in via regions on the eastern slope of the Andes such as the Huanuco basin. Some of the motifs on the ceramics or bone objects of the Kotosh period, the Early Formative period of the basin, show a feline motif (Fig. 6-1) and marine shells. The expression of the feline is greatly different from that of the chavin period (Fig. 6-10). These motifs are not known in the other contemporary sites; hence, they are original designs in the Huanuco basin. The existence of the products of the tropical forest or of the coastal area in this region indicates that certain means to exploit natural resources or an exchange network was already established. This is also supported by the fact that a lot of bones of camelid and deer were from the pre-Chavin layers, both of which do not originate in this region or in this ecological zone, called Yunga, but in higher elevations. Together with this, the similarity of the Group B pottery at Chavin de Huantar with the Grooved B-1 pottery of the Huanuco basin suggests that it is highly possible that the pre-Chavin culture in the Huanuco basin participated in giving rise to "Chavin".

The Chavin traits also include complex combined motifs, typical ones of which consist of the Chavin elements. Complex combined motifs already existed in the pre-Chavin period at Pacopampa, though they do not carry the Chavin elements (Fig. 8-2). The Staff God, another important Chavin trait, was found at Pacopampa, which does not, however, have the complete set of the Chavin elements, but have some localized features. This might suggest

that although Pacopampa participated in giving rise to "Chavin", it maintained its independence from "Chavin" for a while, and even after having accepted "Chavin", Pacopampa seems to have kept its identity. Therefore, the relationship between Pacopampa and Chavin de Huantar might not have been the ruler and the ruled, but have been close to equals such as in an alliance. One of the reasons for that seems to be the obtaining of certain natural resources.

It is well known that spondylus and strombus were very important in the ceremonial and ritual context in "Chavin". At Pacopampa, in turn, it was found that obsidian increased in the Chavin period and it was from Quispisisa in the Central Highlands. In spite of the existence of the nearer sources of the obsidian, such as Mullumica in Ecuador, Pacopampa obtained the obsidian from a distant source. Pacopampa is located in the extreme North Highlands of the Central Andes and is directly connected with Chavin de Huantar through Marañon River. This might suggest the strong relationship of Pacopampa with Chavin de Huantar or the Central Andean area. Pacopampa could have been an important center of transportation as well as of religion.

Cerro Sechin is famous for a lot of stone sculptures surrounding a platform. Pozorski interpreted them as the commemoration of a battle. Although the expression is greatly different from that of "Chavin", some motifs are seen on stone sculptures at Chavin de Huantar (Fig. 2-3). It is noteworthy that the step motif, one of the typical motifs of the pre-Chavin period in the coastal area, is also depicted on it. The stone sculptures similar to Type 3, a rare type at Chavin de Huantar, are seen at Cerro Sechin, too. Taking into account that ceramics accompanying with these sculptures are not yet found, these features seem to appear earlier at Cerro Sechin than at Chavin de Huantar. Apart from the question whether they were directly brought into Chavin de Huantar from Cerro Sechin, some of the motifs found at Chavin de Huantar had already existed in the coastal region from the pre-Chavin period. This can be supported by the fact that little of the diagnostic Chavin traits are seen on the stone sculptures at Cerro Sechin.

Cerro Sechin is located a little inland, close to a river, and makes a site cluster together with the other sites having a public construction of the pre-Chavin period. That is, the pre-Chavin culture and society of this region was considerably developed, being based on farming in the floodplain of the river (Pozorski 1987). Therefore, the possibility that this region, closest to the Chavin sphere, participated in giving rise to "Chavin" is quite high. Cerro Sechin, however, has very unique features, which seems to suggest that the significance of this site is beyond the context of the agriculture and/or exchange. It might have been

concerned with a big event such as a big battle. After the rise of "Chavin", however, Cerro Sechin came to lose its importance. Although the reason is not yet known, it might have been related to the establishment and development of Pallka.

At Karwa, a lot of textiles were found, which typically have the Staff God motif. Being different from that at Pacopampa, which does not carry a complete set of the Chavin elements, the Staff God at Karwa has a complete one and is a typical motif of the later phase of the Chavin period. Ceramics are said to be Ocucaje, and these indicate that the features of Karwa were established under the influence of Chavin. Ceramics of Ocucaje, greatly modified from those of "Chavin", which may suggest that these textiles have a special meaning. These textiles were from one tomb, being different in shape and size from the others. This might be because of the special relationship of the dead/his (her) family with "Chavin" or Chavin de Huantar. That no such motifs have so far been found from the intervening areas might support this idea. Although the former three sites, possibly participated in giving rise to "Chavin", Karwa seems to have little possibility for that. Generally speaking, "Chavin" tended to influence the northern half of the Central Andes. Its expansion to the south occurred in the later phase and might have been related with the control of Quispisisa.

The above-mentioned four sites are located almost at the northern, southern, eastern and western limits of the influencing sphere of "Chavin". These sites could have functioned as a sort of station of the exchange network supplying products from various regions to "Chavin". This kind of long distance exchange network might, however, have existed from the pre-Chavin period and have been taken advantage of by "Chavin" in order to obtain products and materials, especially for ceremonial and ritual purposes, and to redistribute them. That is, "Chavin" might have risen, based on the regional interaction of the pre-Chavin period. Then, why did "Chavin", going against the former trend, rise and come to influence such a wide area in the Central Andes, in spite of the existence of former states (independent/autonomous polities)?

One of the reasons might be the severe aggravation of the climate which is said to have lasted from 900 B.C to 500 B.C., from the Early Formative to the midst of the Middle Formative period. As the autonomous polities of the Early Formative period had already been interacting with each other, they might have faced the crisis at almost the same time. Subsistence and economy were especially severely influenced, and various kinds of contradiction were exposed in the old system. The elite of the society, however, tried to maintain the old order to keep their own high status and privilege. Thus, they needed a new ideology in order to mask the contradiction and/or inequality in the society (Leone 1984, Shanks &

Tilley 1982). The elite might have managed to solve it by creating a new but traditional religious concept and by making people accept it uncritically as a supernatural power. That is, "Chavin" could be a process of change, a considerably unstable state between changing and keeping the old order and system. The acceptance of "Chavin" into each polity seems, however, to have been variable and selective according to the situation of each polity at that time. Although "Chavin" surely influenced these polities, it could not force or unify them. As the process of change involves all, it has various aspects such as culture, society, subsistence, economy and so on. In this case, the aspect of the culture of the process of change is called Chavin culture.

After the occurrence of this process of change, named "Chavin", it expanded its influence, for which the distance between "Chavin" and each polity and the route seem to have been considerably important for the degree of its influence on each polity. It is not yet known why Chavin de Huantar was chosen to construct an important ceremonial center, though it is still questionable whether Chavin de Huantar was really the center (capital) of "Chavin". Anyhow, a typical example of the route and the physical distribution between "Chavin" and a local polity is seen at Pacopampa.

This site is located in the extreme North Highlands and is directly connected with Chavin de Huantar through Marañon River. At some sites, including Pacopampa, obsidian increased in the Chavin period, which was proved to have been from Quispisisa in the Central Highlands, but not from Mullumica or the other sources in Ecuador, despite the fact, for example, that Mullumica is around 250 air km closer than Quispisisa from Pacopampa. Taking the geographical features into account, Burger asserted that there was a natural barrier between Ecuador and Peru, and that any culture could not go over this barrier (Burger 1984). The reason seems, however, to have been more than that. Considering the location and situation, Pacopampa might have needed to join the exchange network of "Chavin" after having accepted "Chavin". As spondylus and strombus were very important in the ritual and ceremonial context in "Chavin", Pacopampa, the biggest center in the extreme North region, could have supplied them to "Chavin" and got obsidian from Quispisisa in exchange. The significance of Pacopampa from the pre-Chavin through the Chavin period is seen in the fact that it has the largest public construction during the pre-Chavin period in the extreme Northern Andean region and it has the Staff God. Not only as the ceremonial center, Pacopampa might also have functioned as a large station of the exchange network:

That the obsidian became important in addition to spondylus and the tropical products and that "Chavin" came to control the important obsidian source, Quispisisa in the

Central Highlands, seem to have permitted "Chavin" to expand to the south. As for the other means of transportation than that through the river, llama caravans inland and ships along the coast are highly probable. In some sites, especially in the highlands, it is known that the amount of the camelid bones gradually increased through the pre-Chavin period and it went beyond that of the deer bones in the Chavin period. One of the reasons for the increase of the importance of the llama may be related to the development of the exchange system during the Chavin period.

Therefore, the polities in the Central Andes during the Chavin period could have been independent from each other, but, at the same time, have been closely interacted with each other through "Chavin" or by being involved into the process of change, i. e., "Chavin". "Chavin" was clearly not a "state", as there was no unity at that time in the Central Andes. It was, however, not a "tribe", either, as there was a hierarchy among those polities, the top of which was "Chavin", and the differentiation of status in each polity. Thus, these polities may be on the level of "chiefdoms". Next, the interaction among these chiefdoms will be discussed.

IV. On the Nature of "Chavin"

As for the interaction among polities on the chiefdom level, Renfrew proposed a model named "Peer Polity Interaction" in order to explain various social or cultural phenomena in these polities. It will be discussed here if his model is applicable to the Formative period of the Central Andes, and the nature and features of "Chavin" are discussed according to his model.

According to Renfrew, the following two things can be tested about the interaction among peer polities.

First of all, when one polity is recognized, other neighboring polities of comparable scale and organization will be found in the same region, and when a significant change is recognized within one polity, some of the other polities within the same region will undergo the the same transformation at about the same time (Renfrew & Cherry 1986 P.7). This is seen from the pre-Chavin period in the Central Andes. A significant change might have occurred at the end of the Early Formative period and the Early Formative polities might have changed their social and/or cultural features, to some degree, that is - forming the beginning of the Chavin period.

Secondly, the observed features will not be attributable to a single locus of innovation, but developed within several different polities in the region at about the same time. In the

Central Andes the origins of the gold works and carved bones with complex or feline motifs are not known and they appeared at almost the same time.

Renfrew discussed possible processes of transformation which are the result of interaction among peer polities. There are three categories of the possible processes (ibid. P. 8).

1) Competition (including warfare) and Competitive Emulation

Warfare will result in intensification in case it uses up the resources, and may lead to the emergence of hierarchical institutions. It is difficult, however, to obtain direct archaeological evidence of warfare. The only possible exception through the Formative period in the Central Andes is Cerro Sechin. "Chavin", however, does not show typical traits of warfare.

Competitive emulation may have occurred to display wealth or power to achieve higher inter-polity status. "Chavin" can, however, be interpreted to have had certain priority from the beginning because of the background of its rise. Hence, this explanation does not seem to fit the case of "Chavin".

Competition may occur among those on the same or similar level of status or in case the low class struggles with the upper to replace it, that is, in the situation that the ideology is lost. "Chavin", however, included a new ideology; hence, the situation was opposite to this explanation after the rise of "Chavin".

2) Symbolic Entrainment and the Transmission of Innovation

Renfrew seems to consider that the symbolic entrainment occurs in a considerably developed world. Symbol and/or prestige, however, are thought to be always important and have been sought at all times in history, especially in the context of religion. The diagnostic Chavin traits can be interpreted as a set of symbols, probably concerning the Chavin cult. Especially the elite in each polity during the Formative period presumably sought the symbol and/or prestige of "Chavin".

Not only the symbol or prestige, but also innovations with nonsymbolic nature are transmitted among peer polities. According to Renfrew, transmission differs from diffusion, as the former occurs among those whose status is more or less equal; also, innovation is not the original invention of a new feature, but is widespread acceptance by the societies. Taking it into account that "acceptance" is important, "Chavin" can be said to show this process. These two processes can, presumably, effectively explain the nature of "Chavin".

3) Increased Flow in the Exchange of Goods

As Renfrew mentioned, this is nothing very specific to peer polity interaction. In the case of "Chavin", however, this process or exchange system should be discussed more in-

中央アンデス形成期文化の研究（Ⅱ）

tensively because the distribution of the ecological zones shows the unique pattern in the Central Andean area, and the products from various ecological zones are seen in various, sometimes distant, regions from an early time. Considering the unique distribution pattern of resources, there could have been suitable exploitation system(s).

So far, the Peer Polity Interaction model seems to be able to explain “Chavin” effectively and persuasively. For future research, it is important to keep in mind that “Chavin” might be a process of change with not only religious concerns but also complex social, cultural, economic and political backgrounds based on the interaction among the peer polities of the Formative period in the Central Andes.